

通 顔 堀

第十年 二月號



昭和十二年正月廿五日
昭和十二年二月一日
昭和十二年二月五日
昭和十二年二月十日
昭和十二年二月十五日
昭和十二年二月二十日
昭和十二年二月二十五日
昭和十二年二月三十日
昭和十二年三月一日
昭和十二年三月五日
昭和十二年三月十日
昭和十二年三月十五日
昭和十二年三月二十日
昭和十二年三月二十五日
昭和十二年三月三十日
昭和十二年四月一日
昭和十二年四月五日
昭和十二年四月十日
昭和十二年四月十五日
昭和十二年四月二十日
昭和十二年四月二十五日
昭和十二年四月三十日
昭和十二年五月一日
昭和十二年五月五日
昭和十二年五月十日
昭和十二年五月十五日
昭和十二年五月二十日
昭和十二年五月二十五日
昭和十二年五月三十日
昭和十二年六月一日
昭和十二年六月五日
昭和十二年六月十日
昭和十二年六月十五日
昭和十二年六月二十日
昭和十二年六月二十五日
昭和十二年六月三十日
昭和十二年七月一日
昭和十二年七月五日
昭和十二年七月十日
昭和十二年七月十五日
昭和十二年七月二十日
昭和十二年七月二十五日
昭和十二年七月三十日
昭和十二年八月一日
昭和十二年八月五日
昭和十二年八月十日
昭和十二年八月十五日
昭和十二年八月二十日
昭和十二年八月二十五日
昭和十二年八月三十日
昭和十二年九月一日
昭和十二年九月五日
昭和十二年九月十日
昭和十二年九月十五日
昭和十二年九月二十日
昭和十二年九月二十五日
昭和十二年九月三十日
昭和十二年十月一日
昭和十二年十月五日
昭和十二年十月十日
昭和十二年十月十五日
昭和十二年十月二十日
昭和十二年十月二十五日
昭和十二年十月三十日
昭和十二年十一月一日
昭和十二年十一月五日
昭和十二年十一月十日
昭和十二年十一月十五日
昭和十二年十一月二十日
昭和十二年十一月二十五日
昭和十二年十一月三十日
昭和十二年十二月一日
昭和十二年十二月五日
昭和十二年十二月十日
昭和十二年十二月十五日
昭和十二年十二月二十日
昭和十二年十二月二十五日
昭和十二年十二月三十日

劑菌殺中口

ルー大カ

錠口生衛

…器容健保 売發新



- 新容器の特徴
- 一、抑へる毎に一粒づゝ氣持よく出る
 - 一、出過ぎ出不足なくお望みの粒數が服用出來ます
 - 一、輕快にして携帯至極便利コンパクトで優美な濃いコパルト色!!



總代理
安藤井筒堂藥品部
東京

本舖

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

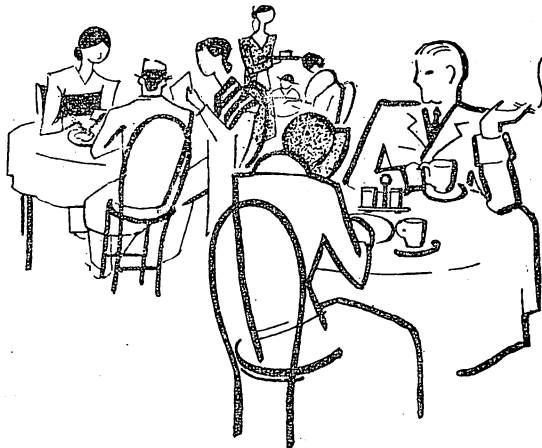
道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では非御會食を！

支店

大阪支店 心齋橋筋八幡筋角
京都支店 北新地裏町
木屋町ドングリ橋





東側

◇道頓堀・昭和十年二月號・第一百輯◇

口★

◎歌舞伎座◎吉右衛門の加藤清正・もしほの秀頼・吉右衛門の荒獅子男之助・
曾我對面舞臺面・梅玉の乳人政岡・幸四郎の濡髪長五郎・吉右衛門の放駒長吉・二
條城舞臺面・双蝶々曲輪日記舞臺面・先代萩舞臺面・積戀雪關屏舞臺面・宗十郎の
與五郎・時藏の吾妻・幸四郎の關兵衛◎角座◎山口の美澤・瀧の美和子・都築の前
川・梅野井の新子◎南座◎菊五郎の太郎冠者・菊五郎の忠信・野崎村舞臺面・菊五
郎の源九郎狐・三津五郎の高足賣・義經千本櫻舞臺面・彦三郎の辨慶・菊五郎のお
光・太刀盗人舞臺面・文七元結舞臺面◎中座◎石河のお妙・小織の幸七郎・高田の
清吉・山口の芳子・十吾の東西屋不二丸・浪花の浪子・天外の武雄◎浪花座◎翫右
衛門の正太郎・長十郎の日本駄右衛門

★繪

作者の立場から……………吉田絃二郎 (三)

双蝶々曲輪日記について……………高安吸江 (四)

梅玉禮讃譜……………西田眞三郎 (六)

南座の頁
「太刀盗人」の試演會拜見……………森ほのほ (三)
義經千本櫻解題……………森山京三郎 (三)

漫情歌
三者追福……………都築文男 (八)

長十郎を語る……………中村翫右衛門 (三)

春興芝居評判……………西尾福三郎 (三)



伽羅先代萩床下珍話……………大川 澱江 (三)

藝談 覺え書……………大橋孝一郎譯述 (三)

中村鴈治丈逝く…………… (三)

評論人 新福助に寄す……………西 尾 生 (三八)

舞台上誌

二條城の清正……………垣 久 桂 子 (八)

人情噺文七元結……………田 邊 淳 子 (四)

義經千本櫻……………羽 根 田 麗 助 (二六)

木曾路の鴉……………前 田 進 (四)

狂言 拔萃……………

◆伽羅先代萩…………… (四〇)

◆壽曾我對面…………… (四一)

劇場街雜音放送……………B・B・B (三)

俳優 優紹 介…………… (二五)

カッ ト……………田 中 滿 彦

扉……………幸四郎の仁木彈正

表 紙……………双蝶々 錦 繪

編輯 後 記……………村 上 勝 (四二)

白雪

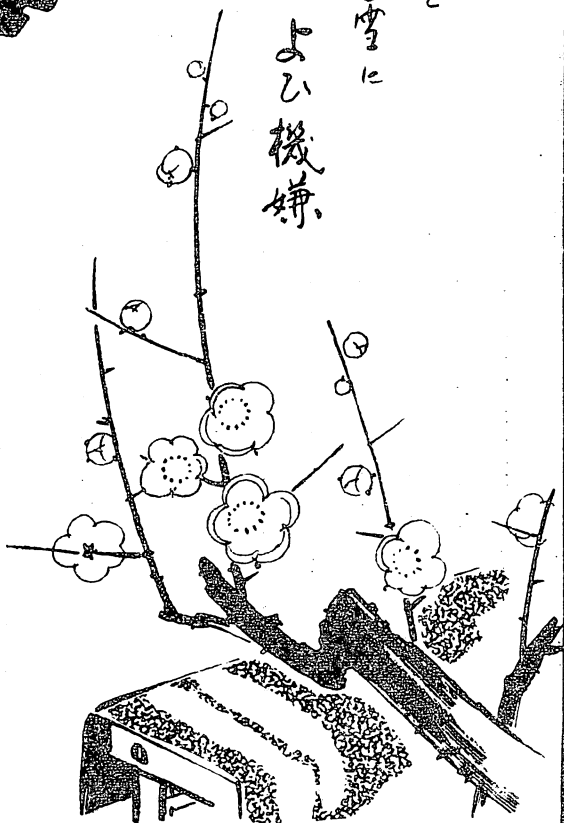
天下の銘酒

シラユキ

うめとうめにと

酌む白雪に

笑顔ほころぶよい機嫌



攝津 伊丹・灘

小西酒造株式會社



◇ 二 月 大 阪 歌 舞 伎 座 ◇

東 西 合 同 大 歌 舞 伎

中 村 吉 右 衛 門

加 藤 肥 後 守 清 正

「二條城の清正」

豊臣秀頼

加藤肥後守清正

中村もしほ

中村吉右衛門

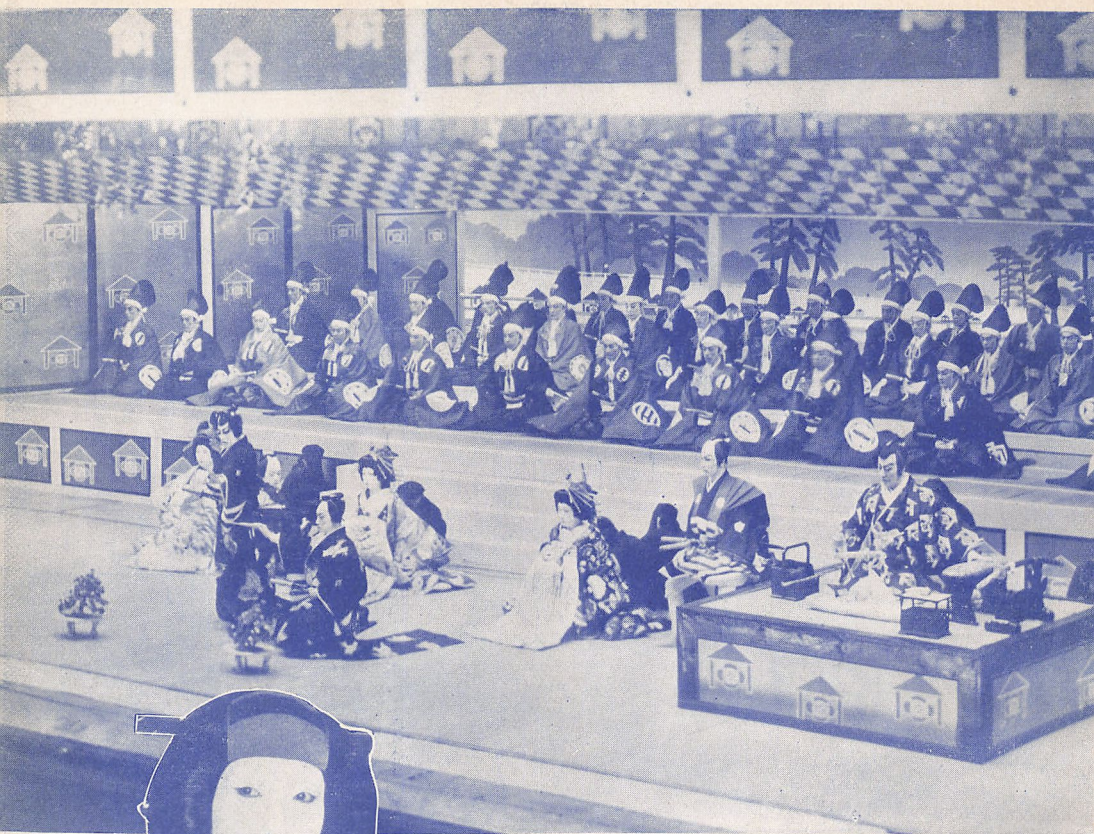


「伽羅先代萩」

荒獅子男之助

中村吉右衛門



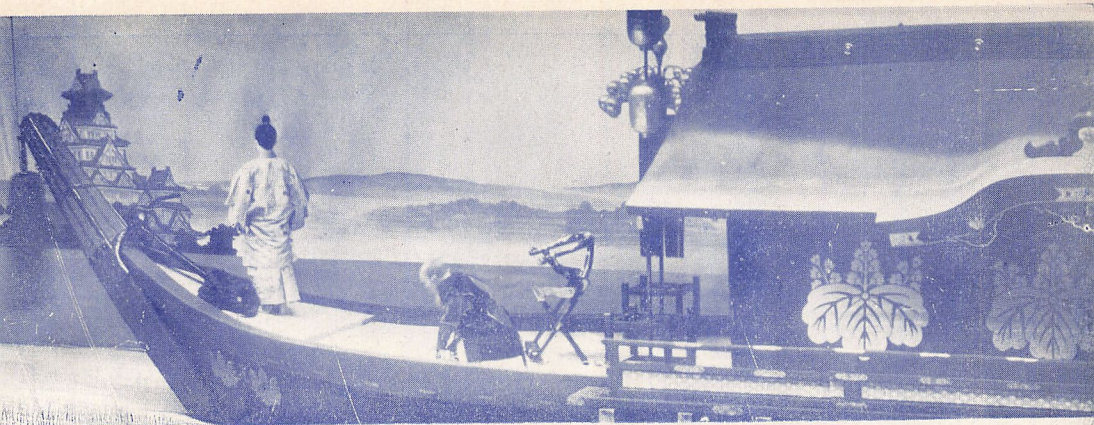


「面 對 我 曾 壽」

面 臺 舞

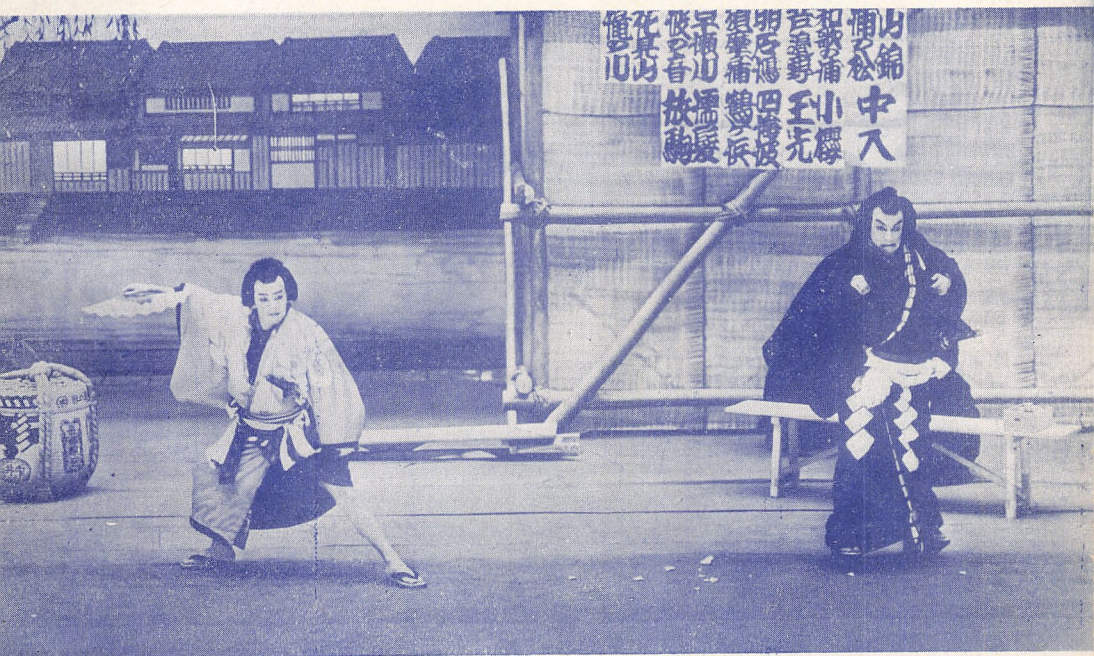
「伽 羅 先 代 萩」

乳人政岡 中村梅玉



二條城清正舞台面

◇ 双蝶々 曲輪日記 ◇



吉長駒放の門衛右吉

◇ 面

臺

郎五長髮濡の郎四幸

舞 ◇



「積戀雪關扉」

關守關兵衛

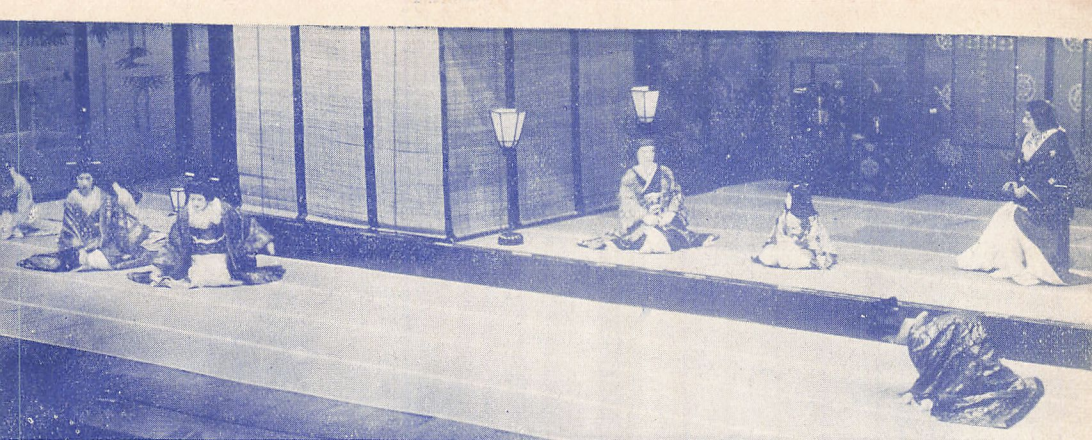
松本幸四郎



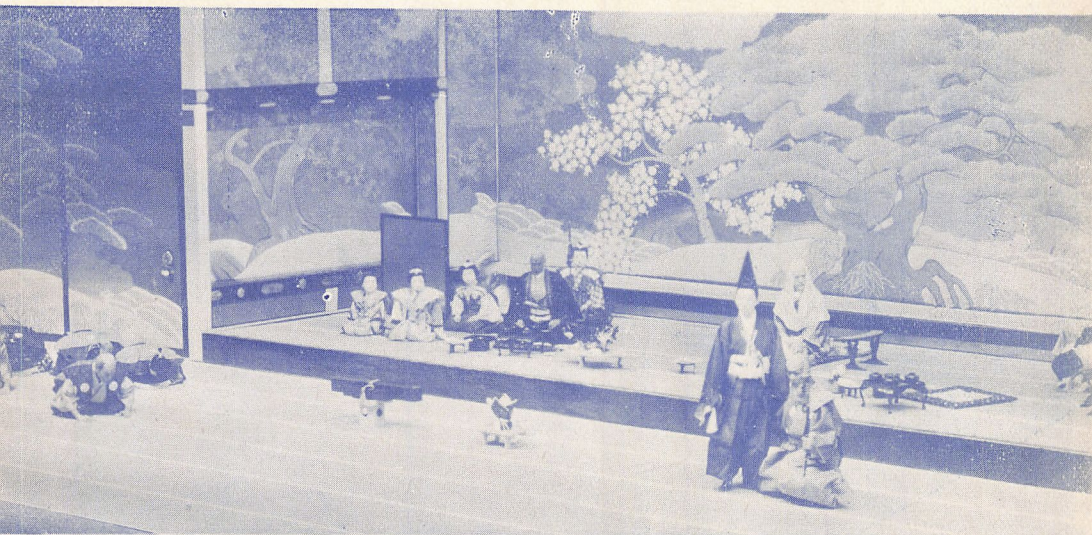
「記日輪曲々蝶双」

郎十宗村澤 郎五與崎山

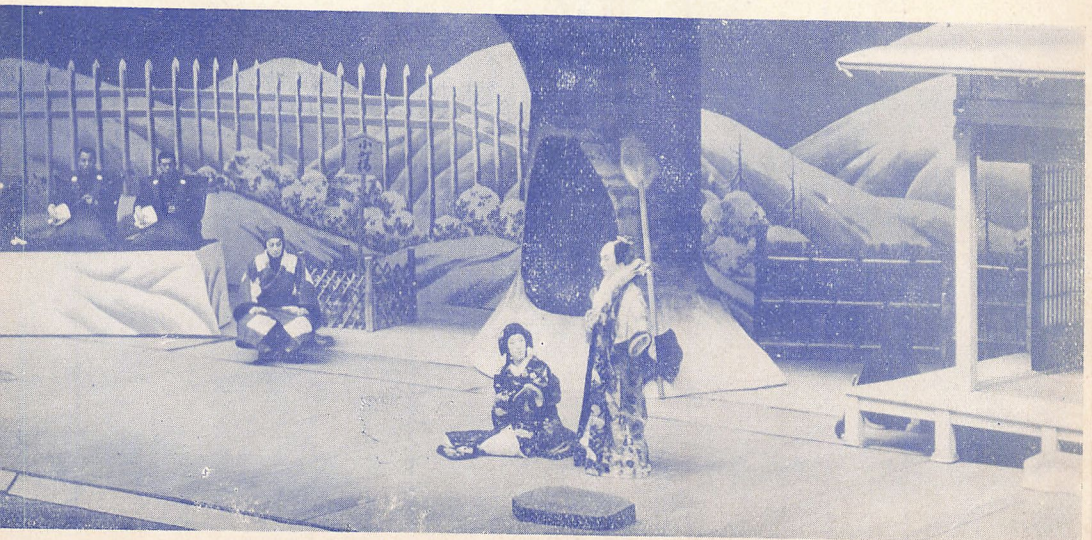
藏時村中 妻吾の屋藤



• 伽羅先代萩舞臺面 •



• 二條城清正舞臺面 •



• 積戀雪關屏舞臺面 •

アングロス并ス

ミルクチョコレート

コーヒキヤラメル

チョコレート

キヤラメル

チョコメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元

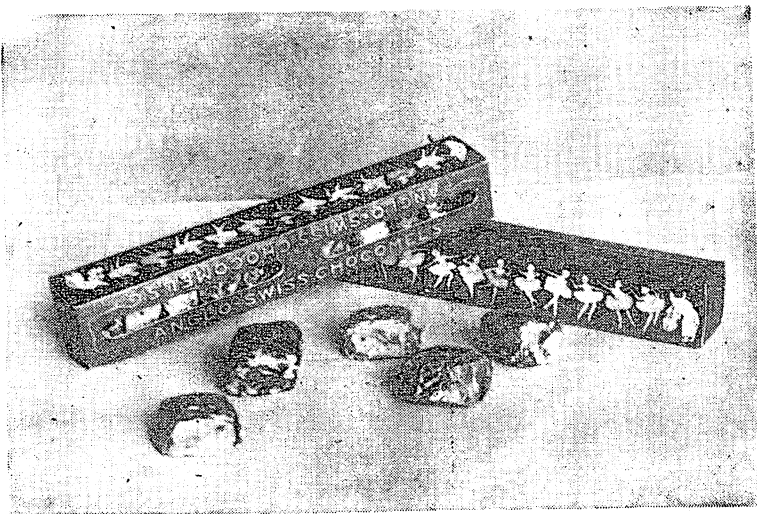
株式會社

横山商店

電話東

(94)

四二一
六〇六
四一六
九三番



エキセ

速効効奏・軟刺無痛無

陰囊疹

(病 膚 皮)

特効薬

エキセは多年臨床實驗を経たる新薬にして世上のいんきん賣薬の如き疼痛、刺戟及角質溶解の作用を有せず、「リポイド」に可溶性なるが故に皮下深部に到達し消毒殺菌の兩作用迅速で治療的効果を顯はす

性狀

アルコール又は油質を含有せざる液體

定價
一圓五十錢
三錢

全國藥店にあり

發賣元 光榮商會

大阪東區伏見町三丁目

振替大阪三三七一七番

角座關西新派



「貞操問答」

澤	美	……	口	山
子	和	美	……	瀧
川	前	……	築	都
子	新	……	井	野 梅





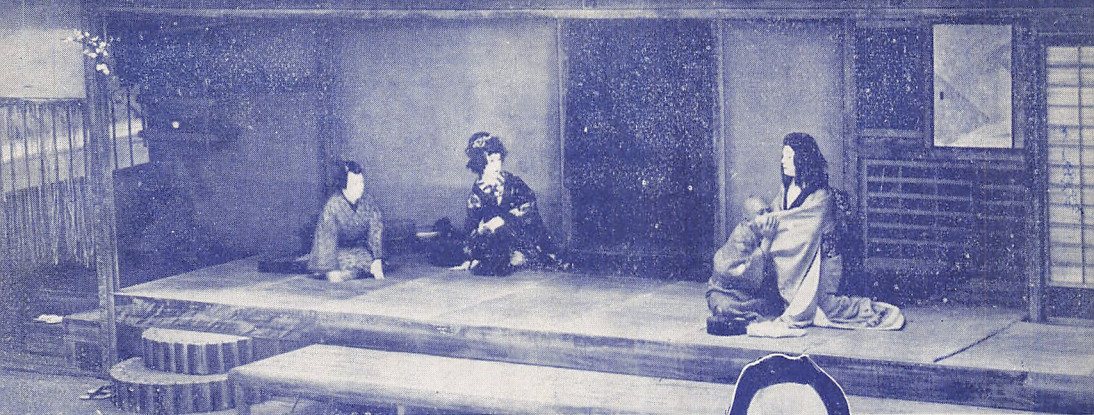


「櫻 本 千 經 千」

場 の 館 連 川
面 臺 舞

信 忠 の 郎 五 菊

◇ 伎 舞 歌 大 京 東 座 南 ◇



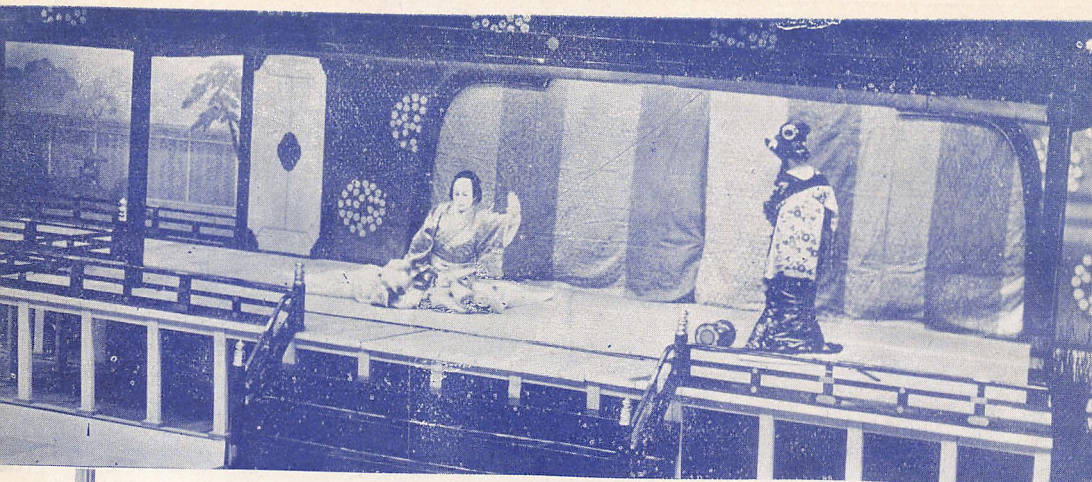
面臺舞「文祭歌版新」



孤郎九源 の郎五菊

「坏 高」

賣 足 高 の郎五津三



面臺舞「櫻本千經義」

彦三郎の

武藏坊辨慶

菊五郎の

お光



◆「天刀盜人」舞臺面◆





◆ 面 臺 舞 「結 元 七 文 話 情 人」 ◆



姉 幸
娘 七
お 清
妙 芳
郎 吉
子 子
の 妙

石 小
河 高
の 田
織 口
の 山

中 座 家 庭 劇

「姉 妹 千 鳥」

唐お吉

新興キネマ東京撮影所第一回超特作映畫

水谷八重子のオール・トーキー

早川雪洲

澤村田之助

伊井友三郎



貞操問答

オール・トーキー

入江たか子
鈴木傳明

伏見直江
山縣直江
汐見直江
岡田静江

大阪毎日新聞連載
原作 菊池寛
脚色 畑本秋一
監督 鈴木重吉
撮影 三浦光男



原作 川村花菱
脚色 川口松太郎

監督 冬島泰三
撮影 古泉勝男

昭和十年度特別大興行



(富士別冊附録所載)

原作 土師清二
脚色 柳川眞一
監督 島泰三
撮影 岡清

オール・トーキー

船唄雀念佛

阪東好太郎 主演
飯塚敏子

坪井哲 廣田 昂
新妻四郎 永井柳太郎 助
山路義人 井上久 榮
澤井三郎 八代輝子 演
關操 柳 さく子

★ 松竹下加茂特作映畫 ★

「チンドン屋の喧嘩」

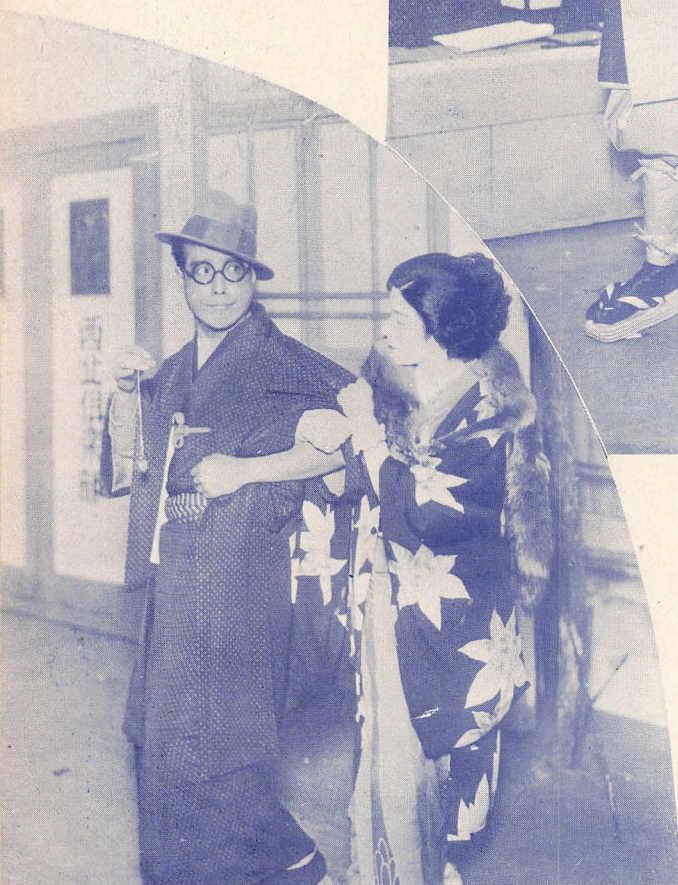
東西屋不二丸

曾我廼家十吾



「物云ふ時計」

浪子 浪花千栄子
武雄 澁谷天外



浪花座・前進座



「木曾路の鴉」

正太郎

翫右衛門

「秋葉權現廻船噺」

日本駄右衛門

長十郎





小道具・小裂

貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

其他一般の衣裳多に不御利用下
さいます客の御相談に應じ便利よく
お取計ひら致す……

松竹衣裳部

本店

東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎五 六三四番
東京市淺草區駒形町二十三番地
電話 淺草 六六六一番

色康健の力魅 美春青く輝

クラブ 美身 クリーム

柔肌を護る冬の美容料

CLUB

35年美
クラブ肌



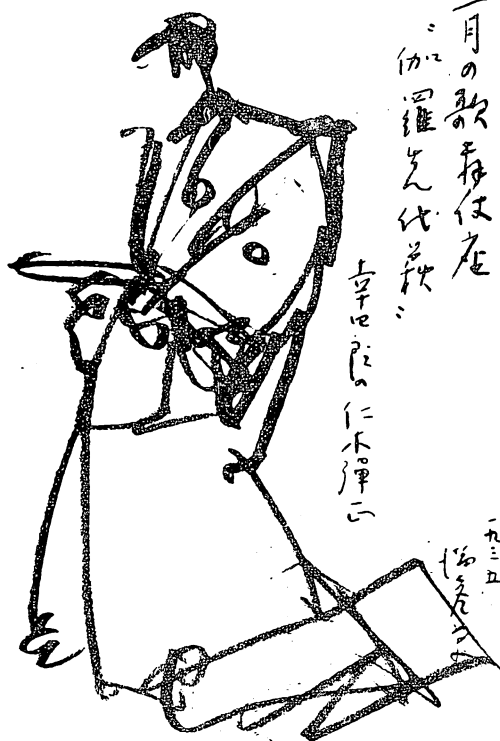
誌難・雲所劇撰・刊内

二月號

通類編

第十年

第 一 百 輯





作者の立場から

吉田 紘二郎

大地震前のことであつた。相州大磯に安田靱彦さんをお訪ねいたしたをり、吉

右衛門氏のために私は戯曲を書いて見ませうとお話をしたことがあつた。そのをりは是非安田さんも舞臺裝置を引き受けて下さるといふお話であつた。それからちやうど十五年といふ時が過ぎてしまつた。一昨年のことであつた、吉右衛門氏が岩崎さんから短刀をいたゞかれた、その紀念に「二條城」を主題にして脚本を書いてくれといふ松竹からの御相談があり、私は初めて吉右衛門氏のために十五

年振りに約束を果すことになつたのである。

吉右衛門氏が岩崎氏から贈られた短刀は、かつて加藤清正が二條城の對面に懷に隠して持つた行つた短刀に擬して作られたもので、中身は備前長船住勝光誠に見事な出來の物であつた。

ところが偶然にも勝光の刀といへば私も忘れることのできない物がある。青島の戦のをり、私も出征するつもりであつたから、いろ／＼と刀を探して、手ごろの物を手に入れることができた。そ

れが即ち勝光の刀であつた。私は早速軍刀に拵へて出征を待つてゐた。自然勝光の刀は私にとつても最も紀念すべき刀であつたので、實は吉右衛門氏の刀の話が出た時も、すくなくらず不思議な御縁だと思つた。自無筆を執るにも何かの因縁があるやうで、いつにもまして筆の運びにも油が乗るといふ有様であつた。それに滅多に舞臺裝置などを引き受けらるゝことのない安田さんが、十五年前の約束通りに一切の裝置を引き受けて下さることになつたといふことは第一に私の創作

欲に油をそゝいでくれた。

私は先づ大體の計畫を樹て、それを手紙のやうな形式で凡そ巻紙三四尋の長さの筋書にして認めて見た。その筋書は多分遠藤爲春さんが大磯に携へて行かれた筈だと思ふが、大磯では吉右衛門氏安田さんなども御一緒に讀まれたことであつたと思ふ。筋書を聽いてゐた吉右衛門氏が泣き、遠藤氏も泣かれたといふやうな話を聞いた。大體そんな阿、筋書だけのをりから、清正劇に對しては、いろ／＼な人々から今迄私が経験したことのないほどの感激と刺戟とをあたへられた。

たしか九月の十六日であつたかと思ふ私ははじめて迎へられて吉右衛門氏の邸を訪ひ、出来上つた脚本を披露する事になつた。吉右衛門氏をはじめ川尻清潭氏遠藤爲春氏その他の人々が集まり、竹柴

梅松氏が全部の本讀みを勤めてくれた。私はそのをりの本讀みほど緊張した本讀みを見たことがなかつた。就中吉右衛門氏の緊張振りといふものは涙ぐましいほどであつた。吉右衛門氏はその日から千秋樂の日まで一切の魚肉をしりぞけ、聖僧のやうな生活裡に文字通りに齋戒沐浴精進の一路をたどつて清正を演じられた。

日本の歴史上最も悲劇的な最期を遂げた秀頼の一生は、かの壯麗な大阪城の天主を見上ぐる人々にとつていつまでも悲痛きはまりなき思ひ出であらう。私は少年時代に幾度か淀川のほとりを徘徊して大阪城のほとりを眺めては旅人らしき感傷に魂を打たれたことがあつた。今、吉右衛門氏の熱演によりて私の少年時の夢の一端を、大阪に於いて、その土地の方々の清鑑に供することができるといふこ

とは、誠に言ひあらはしがたきよろこびである。

清正の陣羽織

歌舞伎座二月の呼物秀山十種の内二條城の清正は吉右の清正、幸四郎の家康、右團次の本多佐渡守にもしほの秀頼、秀調の大政所の役々でこの劇上演に當つては清正の孤忠に感じた各方面の人々が、吉右衛門に對し激勵賞讃の辭が寄せられたが中でも三菱の總理事木村久壽彌太氏は清正の守護刀長船次郎左衛門尉勝元の銘刀を贈り、海軍中將小笠原長生子よりは南無妙法蓮華經の七字の唱號の揮毫を吉右のために贈つたが、刀も小笠原將軍の揮毫も吉右は謹んで同劇中に使用してゐる。

また劇中吉右の清正が使用の陣羽織は書壇の大家安田靫彦畫伯會心の考案で、大阪出演に當り特に新調したものである。



双蝶々曲輪日記について

高 安 吸 江

角力取ならぶや秋の唐錦、嵐雪の句ではないが、江戸前の粹なとはまた別の味で、重厚で絢爛な上方情調が却てお相撲らしい感を深くさせるものです。殊にそれが濃艶そのものゝ新町の廓を背景とするので一層その美しさを増します。それで双蝶々のやうに力士を主にしたものは、後に出来た千両幟など、同様、此花やかさに因つて百数十年來その舞臺生命を保ち得たのであります。

かち負の勝負附と重言多き寶聲も、高臺橋の南詰、今日七日めの勝負をあとに花の吾妻を中心として濡髪、放駒が戀の

達引、味な角力の振り方、わざと譲つた勝負に憤慨した長吉、當時日の出の勢ある濡髪鬘を向にまはし、此方はやうやう素人上り、強い相手に猶負けてゐず、投げるなら投殺しておいて、又改めて頼むことなら、面白い、引きはせぬが、人に物やつて跡から云ふ金の無心はむさいと嘲る放駒の意地は、ねばり強い上方達衆らしい俠骨を示し、暮切の茶碗を砕く技巧とゝもに面白い見所と思ひます。

しかし此れが寛延二年七月に始めて竹本座の操にかゝつた時は、その四年前に出た夏祭と同趣向であるといふので、一般からあまり歓迎せられなかつた様です。成程團七と一寸との達引、敵役を後援してゐた徳兵衛の轉向など、大分似通つた點があるから、それも尤ではあります。が、元來此れは西澤一風の昔米萬石通（享保十）の焼直しに近松の壽門松をからませて出来たもので、濡髪長五郎、放駒長吉の名前のみならず、長吉の家の大寶寺町搦米屋まで種本のまゝ使はれてゐます。

ところが操から芝居へうつると中々の人氣が出て寶曆十三年の冬角の芝居で演つた時などは、其年の十二月廿六日から

翌年四月廿五日まで全四ヶ月もち續けた程の大入大當でした。是は白く清らかな皮膚と立派な逞しい體格をもつた中山文七の濡髪が傑作であつた爲ではあらふが、一ツには當時流行の相撲にも因つたことを見逃がせません。現にその翌年五月大島勝兵衛を勸進元とした大相撲で、東西廿枚目の稻川、千田川が共に初日から勝ちつづけた七日目の顔合には、大阪中はいふに及ばず、伊丹池田その他方々の最良々々の熱狂振は言語に絶し、以來此兩人が漸々七枚目まで昇進する中、互に一勝一敗で人氣は彌が上に登るばかりでした。其結果として明和四年八月には竹本座で例の千兩幟で初演せられ、同五年冬には角、中、大西と三座競演の状態で双蝶々が出ました。その他一々詳しく書立てる程でもないが、役者では前述の文七の外、嵐雛助、三桝大五郎(四代目)

尾上多見藏(先代)など何れも好評を博してゐます。

近來は第八の八幡の段、即所謂引窓の場が寧ろ多く上演せられ、本筋の相撲場、兩人の喧嘩が却て忘れられた形ですが、此れは適當な役者が見つからなかつたせいもありふし、一方厩治郎といふ立派な十次兵衛が控へてゐた爲と考へるのが妥當でしやう。

相撲場より一層出ないのは四段目の大寶寺町です。此場は萬石通のと同様九作に属するものですが、種本程に陰鬱はなく菅原の賀の祝もどきの喧嘩、姉の情味に同行衆の好意から終に長吉の轉向に至るまでの経絡を更に効果的にするため、喜劇的な色彩を豊富にするやうな整理が行はれると、朗かな素質をもつ大阪俳優のために恰好な一幕が出来るであらうと考へられます。そうした詳細は他日とし

てとにかくこうした珍らしい狂言が上演されるのは洵に喜ばしいことであります。

双蝶々曲輪日記

濡	髮	長	五	郎	幸	四	郎
山	崎	與	五	郎	宗	十	郎
團	子	山	吉	三	郎		
呼	出	し	政	吉	福	助	
手	代	萬	助	九	藏		
茶	店	亭	主	箱	登	羅	
藤	屋	吾	妻	時	藏		
放	駒	長	吉	吉	右	衛	門

高臺橋角力小屋の前



梅玉禮讃譜

— 政岡役者として —

西田眞三郎

今度の「伽羅先代萩」の御殿と床下は梅玉の政岡、宗十郎の八汐、吉右衛門の男之助、幸四郎の仁木といふ役揃ひで、殊に歌舞伎座のみが持つ舞臺機構で、御殿の装置、床下のセリ上げなども俳優の演技そのものの外に異常な興味を呼ぶことと思ひます。

政岡役者としての梅玉、かう云ふとまだ二代目の梅玉を語るやうな、何かそぐはないやうな氣持がしますが、それは梅玉といふ名がまだ目新しいためであつて今度の梅玉がまだ梅玉たるだけの貫録が

ないからだといふのでは斷じてありません。福助が三代目梅玉となつてから始めての政岡には自らそれだけの貫録が附加されることと思ひます。その意味で一般に大きな期待がかけられてゐます。

私は先代の梅玉さんの舞臺はその極めて晩年に二三度見たに過ぎないので、殆んど知らないと言つてもよい位ですが、何んでも若い時は風采の立派な優で、立役も女形も出來て、一代の當り役は日蓮上人だつたさうです。明治中期六十歳前後から鴈治郎をシテ役に立てゝ自分は主

としてワキ役に廻つたといふ記録もあります。先代に反して現在の梅玉が福助時代を鴈治郎のワキ役として終始し、今日鴈治郎再起不能となつた哀しむべき時代とはいへ、梅玉の名跡を繼いでシテ役者として起つやうな機運に恵まれて來たのは先代と對照して面白いことです。

立役も女形も出來る俳優と云へば今日では極めて普通なことでは珍らしくないことですが、梅玉が女形を主として演つて來た事に依つて、種々傑れた演技もその女形にあり、中にも殊に「先代萩」の御

殿の政岡が優ぐれてゐる事は今更いふのはくどいやうです。中座初春興行の梅玉襲名狂言として出された「艶競石川染」の石田局も梅玉が得意とする烈女型の一つで、その出来ばえは既に評判された通りで、今度の政岡に至つてはまことに適役も適役、あれだけの政岡役者を大阪に持つてゐることは大きな誇りとしてもいゝ位です。

品位があつて、しつかりした魂を持つてゐて、何となく女らしい情味が匂ひ出るといふ女形としての藝風、男役としてもその氣品の高い風格は梅玉の扮するあらゆる人物に見出し得るいゝ點でありませう。

鴈治郎にはお公郷さん風は高貴な品位がありますが、福助の氣品はいくらか庶民的といふか、大衆的とでもいふのでせうか、何處かに親しみやすい感じがある

のではないでせうか。石田局にしても政岡にしても又は加賀見山の尾上にしてもその舞臺姿を想像すると肯けることです。福助時代の傑れた役々の中には必ずやこの氣品が効果的にヒツトして居ます氣品と云つてもキラ／＼輝くものでなく燿し銀のやうな奥床しさを持つてゐます。青磁のやうな静けさをも見出される類のもので、時として梅玉が扮する處の役柄に冷さがあるとしたらこの沈靜さのせいでせう。亡くなつた梅幸の政岡などとても優れた演技でしたが、竹本劇としての政岡には大阪人は梅玉のそれにより以上の親しみを感じるに違ひありません。

何と云つても今度の政岡には梅玉としての自覺から来る貫録の重みも一層加はり、活目すべき政岡を見ることが出来るだらうと思ひます。(九、一、三〇)

伽羅先代萩配役

乳人政岡	梅玉
八汐	宗十郎
沖の井	時藏
松島	松庭
腰元	成太郎
榮御前	市藏
男之助	吉右衛門
仁木彈正	幸四郎
鶴喜代	光伸
千松	慶三

二 條 城 の 清 正

— 場 四 幕 —

歌 舞 伎 座 上 演

垣 久 桂 子



關ヶ原の戦ひ後——豊臣家の運命は急旋回した。

徳川家康は征夷大將軍を拜しついで、是を秀忠に譲り、茲に徳川家の基礎は築かれたのである。

然し——豊家を嗣いだ秀頼は在りし日の豊家の勢威はなくとも、右大臣に任ぜられ、關東軍によく對峙してゐたのである。

この秀頼を亡きものにせんと何處までも豊家潰滅をはかる家康は、自ら駿府より上洛、使のものをして、幾度となく、秀頼の上洛を促した。

拒めば兵力によつてもといふ態度であつた。

秀頼上洛の問題を中心にして關東關西に無氣味な空氣が流れてゐるのだつた………。

第一場 清正の館

遠く生駒山の姿を後ろにした

清正の館では、その家臣等が、近頃の徳川家の暴威を憎み、ひたすら豊家の行末を案じてゐる。

それに何故か、近頃では、空に妙な光りものがあるのだつたそんな光りものも何故か不吉な運命を暗示してゐるやうて、家臣のものは案じ顔であつた。

この館の主清正は、秀頼上洛問題に就いて、深く決する處があつた。そうして、病の身をかへりみず、神に祈願をしてゐた。

清正は家康の計略をよく察した。若し、上洛を拒まんか、それを理由に家康のことを運ぼうとしてゐる。

決然——上洛しなければならぬ。清正はだから、片桐且元

淺野幸長共々御母公澄君を説いて、上洛をすゝめ參らせてゐる。

然し大阪城中の評議はまとまらなかつた。だが、清正の誠忠は通じ、愈々、明朝、秀頼公上洛と落着した。

そうした城内の報らせを聞いた病ひの清正は奮ひ立つて、家臣に命じる。

「作右衛門は今宵直さま伏見に向つて出立せよ、枚方を通して伏見に參らば御座船の御着を警護せよ、かれて、手筈を致しておいたが、御座船御着の場所には竹矢來を構へある筈なるが、幟幕を張り、屈強の若者を潜はせておけ」

そうして、自らも、愛馬にまたがり

「久し振りで腕が鳴るのう」と叫ぶ、館の内には、將に戦ひの氣が漲つてゐるのだ。

光りのものは何時までも激しく貝の音が、勇ましく響く。

第二場 二條城大廣間

豪華な二條城の廣間——その廣間で、藤堂和泉守と井伊直孝が、この二條城の對面は本多佐渡守が、打った芝居だとか、老ひの清正を罵つてゐる。

やがて、時刻が來た。

家康、大政所、本多佐渡守など秀頼を待つてゐる。秀頼の太刀を持ち、その側に寄り添つて清正が座につく。

「御迎え御苦勞に存じます」

「秀頼殿にはようこそお越しくださいました」

家康はそう云つて、やがて饗宴の準備を命じる。

秀頼の側近くに死を決した清正——すべて、家康の計略を諒つゝがなく、その對面は終つ

て、一同は即刻大阪へ立歸ることとなる。

第三場 二條城門外

清正は必死になつて秀頼により添つてゐる。萬一のことあらば、豊公より賜つた短刀で家康を刺さんとする決心だつた。

家康はじめ、その家臣も、城門外の所まで見送りに來る。

家康は、その清正の態度を見て天晴れの家來よと、心ひそかに感じ、本多佐渡守の手の者共が、その場で、秀頼を討たんとしひしめきあふのを、寧ろ、苦々しく思ふのだつた。

第四場 淀川御座船の場

淀川御座船の上 秀頼の御座船は淀川を大阪へと下つてゐる二條城の對面は事なく終つたとは云へ、途中如何なる危害を加えんもはかられず、清正始め家

臣の面々は寸分の油斷なく四邊に氣をくばる。清正にはもうほとんどなく大阪に着く今の僅かの時間が、彼の朝鮮役に於ける四十幾日かの蔚山の籠城にも増して長く感じられるのだつた。

清正がかうして夜の明けるのを待遠しく思ふ時、靜かに姿を見せたのは秀頼公だつた。そしてその口からは

「爺、そなたの忠義忘れはせぬ病中の身を押し、一命を捨てゝの働き、秀頼冥利の程も恐ろしい……」

と、淋しい言葉が洩れる。

清正には御幼君の此お言葉、衷心より感涙に咽び、聽て懷から一振りの短刀を取り出して

「——御覽下され、是は清正未だ虎之助と申せし頃、賤ヶ嶽の戦ひに太閤殿下の御感にあづかり、勿體なくも御手づから此短刀を賜はり、片時も肌

身離さず所持致す、今は殿下の御形見、いつかは此短刀を持つて君の御恩に報い奉らん所存、時も時、此の度の難題若しもの時こそ清正この短刀にて大御所の命斷たんと懷にかくし、上様の御供致しました」

と必死の覺悟の程を物語り君臣は感極つてひしと手を握り合ふと、折柄雲晴れ水をへだてた彼方に大阪城が見える。清正は思はず

「おゝ、あれゝゝ、大阪城が見えます……おゝ、御本丸のお櫓が見えた」
心から嬉し氣に叫ぶ……。

配役

清正	吉右衛門
秀頼	もしは
家康	幸四郎

● 菊五郎来る ●

● 南座の頁 ●

「太刀盗人」の

試演會拜見

森 ほのほ

去年の二月、南座で踊の中でも許し物の「式三番」を試演した六代目は、今年も同じ日、同じ座で彼自身振付けた、狂言どりの新所作事「太刀盗人」を試演することになった。初めは三十日に催されるといふ話だったが、何か六代目の都合で三十一日の午後六時と改まつた。

私は二三十分程前に南座へ出向いたが、丁度潮時といふのだらう、美しく着飾つた人達が次ぎ／＼に入口へ吸ひ込まれて行くのが電車の窓からも見えた。櫓下の紅提灯、新しく掛け並べられた繪看板、「年の内に春は来にけり……」といった風情である。

玄關の廊下には白井信太郎氏、澤主任、東京の奥役遠藤爲春氏などズラリと顔を並らべてゐられるので目禮して階下の椅子席へ這入る。六代目の後援者として招待されたのは二百名餘りなのだらうが、その外に色々な意味で、色々な方面から見物に来てゐる人々がなほ二百名ばかり、椅子席は三分の二、東西の棧敷も大半は埋つてゐる。

幕は六時十分に片シヤギリにかゝつて、間も無く開いた。胡粉の香が鼻を突きさうな松羽目の前には、大分頭の白くなつた和風、いつまでも學生上りのやうな伊三郎をタテに、三味線八挺、唄八人、太左衛門を眞の囃子方がズラリと雛壇に居流れてゐる。

浮いた合の手で三津五郎のアト、田舎者（萬兵衛）がいつもの狂言肩衣、括り袴の姿で、黄金作りの太刀を持ち、酔つた足取で花道を舞臺へと来る。人の波に揉まれながら、兩側の市店を物珍らしさうにキヨロ／＼と見て歩く——狂言らしいアツサリした演りくちだが、光景は

充分に浮き出して、全く輕妙の二字に盡きる。

處へ、やはり花道かり菊五郎のシテ、洛中のすつば、九郎兵衛といふのが、黒地色入の厚板を壘折に着、織物の狂言袴、投頭巾、青黒い髭を描いた物凍い面構へで現はれる——。

この所作事は、能の狂言に精通してゐた故人、岡村柿紅氏が、同氏の「身替座禪」(能狂言の「花子」)「棒しばり」、「閻魔」等と同じ、所謂狂言どりの新所作事で、明治から昭和へかけて發表されたものゝ一つである。振はども菊五郎自身が附けたのだが、いつも對手の三津五郎丈も平常から能や、狂言を多く見てゐる人であるから全然振附の相談に與らなかつたのでもあるまいと思はれる。

すつばの九郎兵衛が人の波に押されてゐると見せ掛けながら、實物に氣を取られてゐる萬兵衛の刀の紐を素早く自分の腰へ結び付ける處、刀劍の由緒を互に負けずに物語る振、刀の地肌、焼工合を説く連れ舞、文盲な九郎兵衛が「正宗の正は……」と萬兵衛の眞似して胡魔化し書きをやる、とぼけた科、刀の寸尺を問はれて行き詰る

可笑味、全く六代目、三津五郎、それ／＼の持ち味である。殊に連れ舞で、一ト手、一ト拍子づゝ遅れながらビタリ／＼と間を合せて行く皮肉な型は、作者の覗ひ處を實に適確に表現し得たもので、三津五郎とのイキにも寸分の隙無く、全く息もつかせない面白さ、幽蓋相應すと謂ふのは是れである。

すつばの九郎兵衛も寸尺で行詰つて、遂に化けの皮が現はれる。壘折を捲り上げると、背中に様々の盜品を取り附けてゐる。そしていつもの追ッ掛けで、すつばは花道へ抜けて逃げ込む——可笑味タツプリの引ッ込、それ以上品な笑ひで、この鳥羽繪を見るやうな一ト幕は賑やかに閉ぢた——。

この夜、いかなる譯にや祇園の若き妓達も多きは丸薙に結つてゐたり。拙句あり——
音羽やの試演會へは薙で行き

太 配
盗 役
人 役

田舎者	萬兵衛	三津五郎
目代丁字左衛門	彦三郎	
從者	藤内	男女藏
すつば九郎兵衛	菊五郎	

● 菊五郎来る ●

● 南座の頁 ●

義經千本櫻解題

森山京三郎

如月興行の南座には珍らしい千本櫻の四ツ目が出て居りますので此の月は「義經千本櫻」の解題を試みることに致しました。

義太夫狂言の内でも取分け代表的な名作と申せば「假名手本忠臣蔵」を筆頭に「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」の三狂言で御座いますが、此の狂言の何れもが、竹田出雲、三好松洛、並木千柳のトリオから生れてゐるのですから、成る程この三人は淨界にとつてはたいした存在である譯です。

先づストウリーから申しまするに、全體の題材としましては、壇浦で没落した平家の後日物語とも云ひつべきもので、題名の義經は餘り活躍せず、あだかもお刺身のツマの如き存在でありまして、返つて銀平、權太、忠信

の三人が主要人物として此の狂言を點綴して行くと云ふ組立になつて居ります。中でも忠信の活躍する第四段目が一等優れて面白く見えた眼にも最も美しいのですが、どうしたものか關西では久しく此の段の上演に恵まれませんでしたところへ、此の月の南座で計らずも六代目の忠信によつて珍らしい絢爛な舞臺に接しられると云ふことは、眞にフアンに取りまして嬉ばしいことと申さねばなりません。

原作は例に依つての五段続きですから順序を追つて述べてみませう。

第一段大序 大内の段

藤原朝方が義經に豫て所望する初音の鼓によつて、賴朝を討てよと暗示します。

中 北嵯峨草庵の段

維盛の御臺若葉内侍が若君と共に草庵に隠れてゐること知つた朝方の臣が討手に向ひますが、小金吾が二人を荷物の中に隠まつて、維盛のゐる高野へ立ちます。猶、此の段は來るべき第三段目の伏線となつてゐるのであります。

切 川連上使の段——賴朝、義經の決裂がテーマとなつて居りまして今度ト演される堀川御所前之場は此の

段の後半の一部に當るところで、歌舞伎として上演される場合は大抵こゝから舞臺にかゝることになつて居ります。鎌倉方の討手を辨慶が只一人門前に立ちふさがつて軍兵共の首を引抜き用水桶にプチ込んで、例の大長刀で掻き廻す、一名「半洗ひ」などと云ふ名稱のある所以は即ち此處から來た名稱だと思ひます。

第二段口 伏見稻荷の段——一名「鳥居前の忠信」と稱すべき舞臺でありまして、その筋は、義經は自分の跡を慕ふ靜を、初音の誠と共に立木に縛りまして落ち延びましたが、その後へ逸見藤太が來て靜を引ッ捕へ様と致します。その時故郷に歸つてゐる筈の忠信が忽然と現れまして靜を救ふと云ふ物語で、此の段は來るべき第四段への伏線として重要な役目を持つてゐる段で御座います。

中 渡海屋の段——切 大物浦船車の段——この二つの段では渡海屋銀平實は知盛が義經を亡さんことを企み、返つて自分の身を破滅に導く物語を描いたもので、最後に知盛は碇を擔いで入水しますので「破知盛」と通例に呼ばれて居ります。

第三段口 吉野下市茶屋の段——一名「椎の木」と稱される處で一段目の中で登場した若葉内侍や小金吾が再びこゝで登場します。若君のお慰みに椎の實などを拾ひ集

めて居る二人の前へいがみの權太が現れて金を強請のります。

切 鮮屋の段——此處は毎度上演されてゐる個處です。から今更申上げる要もありますまい。第四段目に入りまして愈々忠信の活躍する場面が展開致します。最初が

道行初音の旅——こゝも毎度お馴染みの舞臺。現在では此の場の演出に當つては清元或は清元と義太夫の掛合で上演されて居りますが昔は常盤津又は富本に依つて演じられたと云ふことを承つて居りますが此れは餘談。

口 藏王堂の段——川連法眼は横川覺範その他と謀つて義經を討つべきや、隠まふべきやを評議します。

中 川連館の段——切 横河義經出合の段——此の二段の太眼目は矢張り二人の忠信の演出法に興味の中心が置かれてゐて、此の點六代目の巧緻を究めた舞踊の手振や物腰が如何に巧妙に活用されるか。またあのふくらみのある六代目のマスクが如何に忠信役者として當代無比のものであるかと云ふことを申述べて置きませう。

五段目 吉野山の段——朝方を横河は切り捨て、又忠信は横河と奮戦して兄繼信の仇を報じます。

人 情 嘸 文 七 元 結

— 幕 五 場 —

南 座 上 演

田 邊 淳 子



序 幕 左官長兵衛内の場

割下水のジメジメした長屋續きの一棟が長兵衛の住居だつた此の主人公長兵衛氣前は、いゝし腕は立つと云ふ好人物だが、酒と博奕に魅入られて、近頃はトント家も省みない有様に、お定まりの片方では借金を重ねる一方だ。今日も朝から出たツ切り雀で、もう四圍も黄昏と云ふのに未だ長兵衛は姿を見せない。それに一人娘のお久までお晝から出た切りでこれも行方知れず女房のお兼(多賀之巫)は一人でヤキヤキ胸を焼いてゐるところへ、ブラリツと長兵衛(菊五郎)が歸つて來た。

「お前さん、何處をブラついてゐたんだい。それに大變なことが起つたのだよ、お久が何處かへ行つて終つたんだようお久はキツとお前に愛想をつかしたのに相違ない。誰だつてこんな貧棒世帯は嫌やだか

られエ。」

「オイ、お前は俺が酒や博奕を止めるだらうと思つて嘘を付いてゐるんだらう。」

「呑氣な人だね。長屋衆みんなで探して貰つただけぢ……判らないんだよう。」

「本真か。」

と流石の長兵衛も女房の眞摯さに心配になつて來たのだ。立上つて出懸け様とすると、若衆の藤助が長兵衛の住居を訪れて來る。長兵衛は借金取りだと思つてアタフタとするが藤助だと氣付いて先づ安心の體で、それに不思議なことには此の男お久の居所を知つてゐたではないか。つまり藤助の話によると、お久は吉原の女郎屋角海老の方へお晝から來てゐるし、それに就いて女將が長兵衛に話があると云ふので呼び出しに來たのだとの一部始終。

「しかしこの身なりじやア……娘アお前の着物を脱げ」

長兵衛女房の着物を着た變な恰好で藤助と角海老へ急いで行く。

吉原角海老樓の場

角海老の女將の部屋。女將の前にお久(丑之助)がボツネンと涙に濡れて坐つてゐる。まるで可憐な花が雨に濡れてうちしほれて居る様だ。家の借財の始末なつける決心で自分の身を賣らうと角海老を訪れてけなけな彼女だつた。

藤助に伴はれて來た長兵衛は始めて娘のやさしい心根に良心を取戻したのだつた。

「濟まれえ……お久……堪忍してくんやよ」

何時にない長兵衛の聲は涙にうるんで、かすかに震えてゐるのだつた。五十兩。これがお久が身を賣つた尊い金、お久の手から長兵衛の手へ……。新らしい涙がまた二人の頬に止めどもなく流れた。

「では失禮致します」

長兵衛立上つたのだが、餘り固くなつて終つたのでレビレが切れて、ヒヨロヒヨロヒヨロ。

二幕目 本所大川端の場

外へ出るとスツカリ夜になつて寒さがひびく身に沁みた。大川端のほとりまで来ると、小石を袂にれじ込んで身投げをしそうな番頭風の男。小間物商和泉屋清兵衛の手代文七（男女藏）は集金の金子五十兩を紛失した申譯の自殺しあやふい所へ長兵衛が通り合せたのである。

「じやお前五十兩ありや死なくともいゝんだらう。」

「ヘイ」

「命は金で買へれエ。さア、俺が五十兩わ前にやらう。しかし此の金は娘が身を賣つたかけがへの無い金なのだぞ。」
文七に同情した彼は遂々大切な五十兩を此の手代に投げ與へて了ふのだつた。

「若し……こんな尊いお金を頂きましては……若し……」

と呼び返したが、既に長兵衛の姿はそこいらには見當らなかつた。只闇が深かゝつた。

「有難う御座います。」

文七は眼を熱くして此の金を頂くのだつた。

和泉屋の店先

お得意先からの報告で文七の紛失した金子は碁盤の下から現れたと判明したが、こうなると心配なのは、文七の歸りの遅いことだつた。

「若しも途中で短氣を起して……」

主人清兵衛はそれを案じた。そこへ文七が歸つて来る。しかも五十兩の大金を持つて……これは實以つて意外なことだつた。忽ち疑ひは文七の身にかゝつて来るのは當然と云つてよかつた。不正な金子。——だがその金は……

文七は大川端の一件を詳かに述べて申し開きをしたのである。

「フーム何と云ふ立派なお方だらう。娘を賣つた金を人に恵む。コレやこの儘では濟まされませぬ。」

スカツリ長兵衛の仕打ちに感心した清兵衛は番頭の忠五郎と何やら打合せをした様子である。

三幕目 左官長兵衛内の場

「人に恵んだなんて體裁のいゝことを云つて私を詐さうと云つたつてその手は喰はないよ又何處かで人に吸はれて來たんだらう。而も娘の身を賣つた大切な金!!何と云ふお前さんは……」

長兵衛いくら本眞のことを云つたつて信用は全く零である。又一喧嘩持上りそうなのはいい。——その時、清兵衛が文七を伴つて此の家を訪れる。ジバン一枝の女房驚いて屏風の後ろへ隠

れて了ふ。清兵衛は色々とお禮の言葉を申し述べるのである。

これでどうやら、氣嫌も沈まつたらしい。屏風からチヨロチヨロ顔を出す。お禮の金子が長兵衛の前に積まれる。そればかりではない。

「お父さん」

聞きなれた聲。娘のお久だ。長兵衛はシツカリ強く抱きしめた。

「お久か!」

女房お兼かうなるとジバン一枚のことも忘れて飛び出した。

「オウ……お久……」

みんな清兵衛の計らひだつた。而も手代文七とお久を夫婦との心組。憎い程さばけた計ひ様だつた。長兵衛餘りの嬉しさにしばしは言葉も出ない程である。わけもなく眼頭が熱くなつて來た……なごやかな空氣の内

幕

義 經 千 本 櫻

— 川 連 館 場 —

南 座 上 演

羽 根 田 麗 介



幕くが開くと櫻の釣板に一面の山幕。吉野山の體裁である。その幕の前で先刻からヒソヒソと相談話をしてゐるのは横河覺範の衆徒達と見受けられる。義經を隠まつてゐるに相違なしと睨むだ一味の者が今宵法眼館へ夜討に入つて義經の首を見事討取つてみせやうと力み乍ら色々と密議をこらしてゐるのだ。そして相談終つて山おろしの鳴物で下手に入ると山幕が切つて落される。——瞬間、目も綾な川連館の舞臺が出現するのである。

此の館の主川連法眼は妻飛鳥の心を試さむものと、『此の法眼今日よりは義經とは敵味方、鎌倉殿へ討ち渡す所存。疑はしくは是を見よ』

と書狀を妻に見せる。書狀には義經を隠くまつてゐる事が鎌倉方に漏れ聞え、速刻討取る様にとの旨がしたゝめてあつたのだ

飛鳥の顔がサツと一枚の紙の様に蒼白になつて行つた。無理もない。飛鳥と云ふのは鎌倉方の忠臣荻野左衛門の妹で、自分が夫に隠して鎌倉方へ密告したと疑はれることを恐れたが爲であつた。彼女は夫の刀を抜き取るより早く、自害せんものと思ひ直した。法眼は始めて妻の心を見抜き疑ひを晴らすことが出来たのを内心喜んだ。

『飛鳥、汝の心底は見えた。』

これこそ汝が心を引見る偽狀、安堵致せ。』

と、目の前で件の書狀をズタズタに引裂いて見せた。義經は次の間でジツと此の様子に氣づかつて居られたものとみえる。奥の間より靜かに出させ給ひ、『妻女の心底詞には述べがたし。過分に存する』

と又一しきり暗涙にむせばれるのであつた。

此の時近侍の一人が忠信の來着を言上する。忠信と申せば義

經公の御氣に入り、曇つてゐた義經の顔に一抹の晴れ晴れしさがこみ上げて來た様子である。『母の病氣で思はぬ長旅。堀川御所も没落と承つて残念至極。申譯けも御座りませぬ。』

と忠信は平伏する。

『其の方に逢ひたるは我運の未だ盡きざるところ。しかし、汝に預けたる靜は如何相成しぞ』

『靜御前？手前一向に覺えは御座りませぬがこれは何かの御間違ひ……』

極力申述べても無駄だつた。忠信も餘りの不思議な義經公の質問に答へるすべも無かつた時、又一つの不思議が起つた。それは、

『靜御前がお供に忠信殿を引つれて御到着で御座りまする。』

と報じて來たからである。義經の前に偶然二人の忠信が登場し

たのだ。

『忠信此處にある上に、また忠信が来るとは、我が名を詐る横着物、引縛つて疑ひ晴さん。』

やがて静御前の登場。忠信を見て、

『うつとの間にも先へ抜けがけ、未だ戦場と思ひやるか』

『静さまも左様な身に取つては覺えなきお尋ね。私は只今、故郷出羽より戻りましたばかり』

そこへ静のお供に待つと云ふ今一人の忠信の様子を探りに行つた龜井六郎が

『静様御同道の忠信の行方が知れませぬ』

と申上げるので愈々不思議。静も氣を静めて考へると成程思ひ當る節もある。

『君より賜ひし初音の鼓、打つて慰む度び度びに、其音を感に堪える事、酒の過ぎ

たる人同然。また忠信を見失ひたるとき打てば、必ず不思議や目の前に現れること……』

『ウム、鼓を打てば歸るへ来るとは、それぞ詮議のよき手段』

と、これから此の芝居の眼目である鼓を打つての忠信が詮議が始まる譯だが、遺憾乍ら此のシーンの面白さは逆も筆舌では書き表せるものではないので此處は舞臺のお楽しみとして、只、静の件をした忠信は實は狐の化身であつて、初音の鼓に張られたはこそは此の狐の親の皮、それを暮ふて附添つて來た筋骨だけを申して置かう。

義經は狐の物語りに感動したか、

『畜生乍ら親子の情、恩愛の節義にはかはりなし、取り分け長の道中に静を介抱したること詞には述べ難し。是を汝につかはさん。』

と、狐は兼ての念願だつた初音の鼓を義經より賜る。

『その御恩返しとして、今宵横川の一味の者が夜討を致す企てに、我神通力を以て残らず討ち取つて御覽に入れます。』

と固い約束を交し、鼓を持つて立消えて了ふ。館の人々は此の不思議なまざまざと見せ付けられてホツとしたおももちだつた此處で舞臺には綱代幕が下りて来る。その幕の前で横河の衆徒達が色々と狐に欺されることがあつて綱代幕が切つて落されると再び元の法眼館。大陸摩。ドロドロと狐火で、横河覺範が大薙刀に狐をふまへてセリ上つて来る。歌舞伎趣味濃厚な場面だ此の狐が引抜いて源九郎狐の姿に變るのである。

南座は毎日 ● ●

午後三時開幕

堀 頓 道
堀 頓 道
堀 頓 道

一ヶ年

三圓十三錢

年極め御購讀を ● ●



漫 情
談 歌

三

者 追 福

都 築 文 男

ハ都築ますから 河原らぬやうに

厚い ヒイキで 人來鳥

京都 鬼 佛

墨痕鮮やかな短冊一枚!!

京都、京都座の都築、河原一派、大正
拾年×月興行、瀬戸英一氏作「人來鳥」

上演の初日、京都日日新聞記者、藤谷鬼
佛氏がわざわざ樂屋を訪問て寄贈してく
れた。

鬼佛氏は演藝花柳記者としては勿論俳
人としても堂々たるもので特に情歌には
一しは秀れた文才であつた。

かけ調の作意が餘りにも縁起が好いの
で、すっかり喜んだ私は直ぐに其短冊を

敬々しく押頂いて部屋的神棚にお祭りし
て燈火を供え、拍手と共に禮拜をしまし
た。

ところが不思議にも其芝居が大當りに
當つて初日から千秋樂まで押すな々の
大盛況が過ぎました。

そこで打上の直後、其大入祝を兼て京
洛、鴨漕の某樓で一夜千鳥の啼く聲を耳
にしながら、鬼佛大人の短冊を正座の床
の間に飾つて、それに因む情歌の運座を
飛入勝手で開催しました。

即吟、佳句、續發。

ハ濡れて見たさの下心から
入れて 貰つた 傘の内

ネオタリウ
Neotaurin

結核唯一の
直接療法!

結核治療に幾された
る唯一の直接療法!
結核菌に直接作用し
積極的に之を撲滅す
る注射薬なり

◆本剤の特徴◆
結核菌に直接作用す
食慾亢進、體重増加
發熱消散、盜汗停止
七%確保副作用絶無
結核各期に應用可能
肺結核、肋膜炎、
腹膜炎、其他慢性
諸疾患(文獻欣賞)

○一五〇〇cc 大瓶
○一〇〇〇cc 中瓶
○六〇〇cc 小瓶
○三〇〇cc 小瓶
○一五〇cc 小瓶
○一〇〇cc 小瓶
○五〇cc 小瓶
○二五cc 小瓶
○一五cc 小瓶
○一〇cc 小瓶
○五cc 小瓶
○二cc 小瓶
○一cc 小瓶

大正十三年三月
大阪府大阪市
東区南船場
三丁目一
番五
丁
所
研
究
所
ネオ
タリ
ウ
タ
リ
ウ
大
正
十
三
年
三
月
大
阪
府
大
市
東
区
南
船
場
三
丁
目
一
番
五
丁
所
研
究
所

大阪 片岡愛之助

大人ぶつたる この子の仕打

川と 寝るのも 恥かしい

大阪 末吉 春人

狸寝入の仕打が 憎くい

勤め する身を知りながら

京都 三宅 喜來

不肖尾と 知りつゝ今寝入花

起しや 歸つてしまう人

神戸 胡 蝶

酔つてぶら／＼ぶら提灯に

送り出される 千鳥足

京都 吉 富

かうした、席上作歌らしい俗謡が、あ

とから／＼と吟ぜられます。然かもそれ

が、其席に待つて居る藝妓の弾く三味線

の絃に乗せて歌つて行くのですから逆も

愉快な朗らかな集どひでした。

やがて情歌の開巻もすつかり終つて、

あとは酒戦酣、飲めよ、唄えの大騒ぎ
種々の隠し藝なども出て夜の更くるのも
知らぬといふ状態でした。

先きの出やうで鬼にも蛇にも

成れば 神にも 佛にも

古 句

最初恥かしがつて黙つて聴いていた藝
妓達も酔ひに連れて客に強られるがま
ゝに、おつな聲でしかも上手に咽喉をこ
ろがして歌つてくれた。

鬼にも 蛇にも 神にも 佛にも

と偶然にも鬼佛の二字を立派に詠込んだ
堂々たる情歌でした。

鬼佛氏はすつかり感謝してしまつて、

「矢張り昔の句は上手いなア」と、しみ

／＼賞讃しました。

其後間もなく病魔に犯されて、流石の
鬼人も文字通り佛と成られたのでした。

あとで氣がついたのですが、情歌會の

繁華街に近く……交通至便・閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

南 地 木 テ ル

南波難海戎地新前停橋

電 南 四一四・四四一番

一 宿 一

二 圓
一 半

額 半 慰

席上床の間の軸が天津繪の鬼の念佛が掛
つて居たのでした。これも鬼佛氏に絡ま
る深い因縁のある事のやうにも思はれま
した。

又「河原らぬやうに」と唄はれた市松
君も好事魔多しで左の情歌のやうに

羽織袴で 手をつくごとに

嘘の氣がする 今朝の春

東京 緑 樹

籤の大吉 凶にかえるかと

梅へ かへした 神の庭

東京 夏 野

三年後の秋に

逢つたばかりですぐ別れとは

星も 冷めたい 秋の空

静岡 吞 兵衛

へ一羽淋しく はぐれた雁が

月へ 影おく 秋の空

東京 緑 樹

とうく口も利かない市松人形と變つ
て行きました。

夕日ながめて 消え入る思ひ

かへしや 逢瀬は 空だのみ

神戸 胡 蝶

これが女房役を喪つた時の私としての
心境でした。全く消え入るやうな淋し
さでした。

心一筋 二筋道へ

義理と 情けの 秋の空

杵屋勝満女

問題の新派劇「二筋道」で愈々其名聲
を謳はれた、瀬戸英一氏は大の酒豪家で
いつも外で飲むと家へ歸る事も忘れ勝て
それから、それへと、梯子をする人でし
た。

好きな下地にうつかり乗つて

だんくのぼつた、はしど酒

神戸 胡 蝶

ケンネツト号



凡人愛好の 摺買車
國産品中の完璧 是非御愛索を

市内特約店ニアリ
株式會社 大澤商會
京都市三條通小橋西

下地は好きなり、御意はよしで可成悪友にも誘はれて酔眼朦朧として花柳の巷に御大盡を極め込むも少なくなかつた然し如何に醉態を極めても、酒席の異性からは何か劇作に關するヒントを得るといふ實に珍らしい頭腦の持主でした。

でもお正月なんかは屠蘇きげんから極度に羽目をはづして遊里に足を踏み入れたもんだ。

「初めの御見のこの御降りは春から留めろの謎かしら」

静岡 呑兵衛

四疊半裡に爪弾きの仇な音締に雨の音さへ織交せて美人の膝を枕に高いびきをかき事もある。かうした、情歌趣味にも平素から自由な解釋をもつて隠れたる濡れ場も可成あつたやうだ。

「降られついでに今日流連の雨の廊に二日酔ひ

神戸 胡蝶
遂に酒が命の瀬戸際で、父君、半眠氏に先立つて、英一氏は、永眠居士と改名されました。惜しまれます、文壇にも……。

我々新派劇界の爲めにも……。

「祭りに行くつて出掛けはしたが何處へお神輿据えるやら

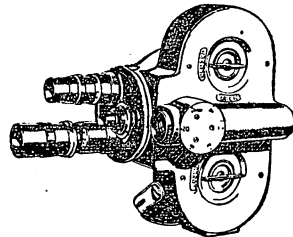
東京 假名阿彌

定めて今頃は賽の河原の地藏座で、故伊井香峰御大が、師弟關係の、河原市松を女房役にして、地獄極樂の「二筋道」を瀬戸氏の脚色で開演中でせう。

藤谷鬼佛氏は、黄泉新聞の記者となつて、劇評に筆を極めて讃辭を呈して、亡者ファンを、やんやと云はせて居る事と思ひます。

南無阿彌陀佛

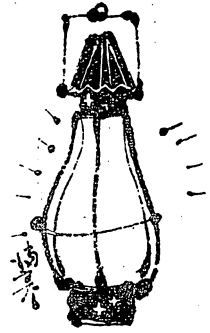
フィルム



十六ミリ界の
最峰高

未だ曾てフィルムカメラで影して失敗があつたか？
未だ曾てフィルムカメラで一呎のフィルムが浪費されたか？フィルムは映畫になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ貴下のなされる事は唯それだけだ

(早進グロタカリあに店ラメカ流一國全)
BELL & HOWELL CO. U. S. A



長十郎を語る

中村翫右衛門

虎ちやん！
と、かう僕達は呼んでゐる。

歌舞伎三百年の歴史！絶へず重要な役割を務めて何代か続いた名門、市川團十郎の流れを汲んだ、河原崎権三郎の一人子河原崎虎之助事通稱虎ちやん！

前進座創立以來足掛五年、歌舞伎時代に親しく成つてから行動を共にしだして足掛八年、相當長い友人虎ちやんだ。

日本の芝居、演劇史的に見て、文化史的に見て河原崎長十郎の名は最早動かす事の出来ない存在であり、現在に於ても日本の持つ俳優の何人かの内に選ばれべき！日本演劇界のホコリとすべき俳優

優だと力説する事を私はあへてはごからない。

そこで私の考へてゐる處を理論めいて書くと長くなるから大略して並べると、日本の演劇の内の歌舞伎と云ふ過去の優れた演劇様式を出来るだけ昔のまゝに正統に將來へ研究的に残すべく努力してゐる事（この三百年來蓄積された演劇様式の中からまだ幾多の研究すべき材料が含まれてゐる、この點に着眼して實行に移した事）

名門出でありながら、その歌舞伎の因習傳統にあきたらず、自ら先頭に立つて因習打破につとめた事（善き芝居を創る

青い鳥の配役

来る十五日より大阪劇場に上演さる OSSK 竹組公演「青い鳥」全八場の配役が本日左の如く決定された。

チルチル（美鈴あさ子）ミチル（芦原千鶴子）かあさんのチル（三笠静子）とうさんのチル（瑞穂衣子）妖女（渚三保子）パン（杉榮澄子）砂糖（虹麗子）犬（美浪スミ子）猫（國友和歌子）光（月丘松子）おばあさんのチル（池澤笑子）おぢさんのチル（友瀬月子）夜の女王（三笠静子）夜啼鳥（月ヶ瀬咲子、大和日出子、沖智世子）等の主要配役が決定した。他の配役は近日中に總てを發表すべく目下上京

には、綜合藝術である演劇には、まづその根本である組織を改革して、その善き島から、よき種を、よき芽生へをと思へて、合議制なる組織の下に前進座を組織した。歌舞伎の中からかうした興行者を離れた、俳優達の共同管理の様な劇團が生れたのはおそくはじめてで、此處では全員平等の義務と責任を持ち、技術の公平なる差異を承認しあひ、個人主義的な技術の發展を打倒し、集團的な技術的發展に拍車をかけてゐる。かうした、島は全然無名から國太郎の様な芽生さへ僅かの間に生む事が出来た。

生活の糧でなければならぬ演劇の役割を考へ、藝術性と大衆性の一致、つまり藝術的な高度なものを、より大衆的に消化して觀せると云ふ點に現在研究の歩を進めてゐる等々數へればきりがなが、彼れ虎ちやんは劇界に於ける確に一特色

ある存在だ。

勿論技術的には前進座員は未完成ばかりだが、彼虎ちやんには……（これはいはゆるお芝居道式の言葉と、觀方からだが）私だけの觀察で、肉體的な香りがあ

る。よく芝居道であの役者は味があると云ふ事を云ふ、役者の味と云ふものも非常にビミョウなものだが、私は虎ちやんに香を知る。

役者には太い線と細い線とある。

例へば高嶋屋は太いとか豊田屋は太いとか播磨屋、橋屋は細いとか！虎ちやんは太い線の役者だとは周知の事だが、その太さ細さが他の俳優にない太さだと私は思ふ。

荒れづりなコブくだらけの栃木山の様な太刀山の様な、その肉體から發散する香……が、高嶋屋や豊田屋の様になめ

中の大西主事よりの返電を待つて決定の由、新人の歌手大和日出子、沖智世子の新人を加へ、これに月ヶ瀬咲子を加へて新らしいボーカルトリオを編成したことである。

門脇陽一郎氏逝く

松竹興行の囑託作家門脇陽一郎氏は去る二月六日午後九時宿痾の慢性氣管支炎惡化の爲死去した。氏は明治二十年三月八日鳥取縣西伯郡後村に生る、二十二三歳頃より當時の尖端的劇作家として既に一家をなし、故村田榮子の爲書卸した「舞扇」等は當時の代表的新派劇として絶讃を博したもので、「新時代劇協會」を組織し遠く滿洲の地まで遠征を試みたのも哀しい語り草となつた。

らかな太さと違つて、異常に力強く、肉體の香を感じさせらる。左甚五郎の作は頭デツカチだつたり、胴が肥かつたりしてもはなれた時に生ける様だつたと云ふ事だが、完成すればそう云ふ方向へ行くのではないだらうか。香つてどんな香だと聞かれるとこんな香いだとは云へないが、これは私だけの感じた香で、私の鼻でなければカグ事の出来ぬ香かも知れない。もし氣になつたら、花道へでも行つ

た時、カイで見てほしい。案外、ジャコウより高い香りがするかも知れない。彼氏強情張りで、僕強情張りで時々夜明しで、顔を赤めあひ、議論に花が咲かす、その花から、何んかしら實が出る時が多い。彼氏怒る時、僕怒らず、僕怒る時、彼氏怒らず、實にうまく出来てゐる。

(一九三五、一、二一八)

「鷗の路會木」

き續ゝまた見

ジタバタするない、上り下りの風來坊の其の正體を知らせてやるから、ビツクリするな。やい權次、定、手前達が彌兵衛をおごして今まで捲きあげた金の出所の本家本元は俺だアと。今までの憤怒を有つたけ浴びせる處へ、又捕手の群が襲ひ、正太郎の邪魔をしますが、遂に定、權次を斬り殺して本懐を達します。

正さん！と呼ぶはお美乃です。

——三年來の確水をかけての木曾路の旅も、鳥井峠のお美乃さんの顔を見るのが果敢れえ樂しみ——。お美乃さん、仲よく暮しれえよ。遠くで盆踊りの聲が聞えます。

向ふ行くのは木曾路の鷗雨が降るぞへ、雨催ひエ、氣にかゝる、氣にかゝる

次に淺草根岸興行部に入り諸口十九などと共に愉快劇と云ふ劇團をつくり新喜劇運動のトップを切る等多藝多才頭の好きを示したが昭和三年以來關西の地に落着いて松竹の囑託となり、特殊なユーモラスや都會のペースの表現等鮮やかに關西劇壇の一偉才として輝いてゐた。昨年の正月以來、主として角座の關西新派の脚本を執筆してゐた。

同座の正月興行「もゝんが大将」が最後の作品となつたが、家庭劇の上演せる「都會のこほろぎ」や映畫より劇化せる「おもひでの雨」「お蝶夫人」等は記憶さるべき好戯曲であつた。尙「坊つちやん」等二三の脚本集を既刊してゐる。

俳優紹介 (2)



▽中村梅玉△

本名……笹木伊之助
住所……兵庫縣武庫郡精道村
生年月日……明治八年一月十四日
經歷……六歳道頓堀中座にて菅原寺子屋小太郎を勤む
明治四十年四代目福助を襲名本年一月梅玉襲名
趣味……繪畫
信仰……法華宗



▽柳 永二郎△

本名……永井武
住所……東京市芝區二本横四町二
生年月日……明治廿八年九月十六日
經歷……大正二年有樂座家庭劇協會に加入、松井須磨子の藝術座、新日本劇團を経て大正八年新派劇團に入る。後、大阪松竹の専屬となること數年昭和三年現新派に籍をおき今日に及ぶ。



▽中村鷹之助△

本名……天野金秋
住所……大阪市南區三津寺町八

生年月日……明治三十九年十月

經歷……七歳にて江戸役者に、十歳にて大阪役者に
趣味……目下はアイヌスケートその他
信仰……八百萬の神



▽藤村秀夫△

本名……小倉秀吉
住所……東京市日本橋區濱町一ノ二
生年月日……明治二十二年八月十七日
經歷……明治廿八年七月井上正夫の門に入り轉々今日に及ぶ
趣味……野球、玉突き
信仰……ないです



▽東 愛子△

本名……東愛子
住所……大阪市南區竹屋町十四ノ二
生年月日……明治三十四年一月十五日
經歷……大阪松竹女優養成所第一期卒業生、現在家庭劇へ出勤
趣味……トランプ、繪
信仰……金神



▽高田 重△

本名……高田金次郎
住所……大阪市南區千代町二
生年月日……明治廿四年五月廿八日生

經歷……八歳にして初舞臺十歳まで出演、父、高田實大正五年死去、大正七年十日東京新派に出演せしも、關東震災後大阪成美團に加入、その後第一劇場、新興成美團を経て家庭劇へ。
趣味……野球、音曲
信仰……金光教

・次第不同・
來月號にも引續き掲載致します。

次號は
鷹治郎
追悼號

春興芝居評判

何がさて猪突猛進とやらの初春景氣の折とて、何處を廻つてみても芝居國は上々吉の黒字オンパレード。そこで筆者も初春勿々からアラ探しの憎まれ役は御免蒙つて舞臺やら客席やら、さては勘定場まで、屠蘇機嫌のウロ／＼眼でそぞろ歩きしてみやう。

先づ中座は昨年の好評に倣つて諸事萬端の古風好み、これが當つて永當々々の大入りで、吉例成駒家の欠勤も何のその、一週間毎に大入の千軒幟が立つて、その都度九千何百と云ふ大きな數字の入つた赤白黃の旗が相踵いで連立してゐると云ふ物凄さ。表の池田さんが福々しい巨軀を慇懃に枉げて場席の不都合な事を詫びて下さる町重さに、こちらも却つて恐縮して、大入で良い場所で見られないのは結局會社の萬々歳と御挨拶するやうな始末である。

だがそれは夜の部の事、何うした譚か晝の若手奨勵劇はそれ程の入りではなかつた。何ほ正月でも午前十一時開幕はチト無理である。對面と炬燵と一休の内では矢張り中者が斷然光つてゐた。扇雀以外に若手で治兵衛を演れる人はあり乍ら、今迄機會がなかつたのか一向にこれ

伽羅先代萩

床下珍話

大川 澁江

大阪歌舞伎座東西合同大歌舞伎如月興行狂言の内、伽羅先代萩は、梅玉丈の乳人政岡宗十郎丈の妻八沙、秀調丈の沖の井、市藏丈の榮御前に、四ツ花菱を尉斗目に附三ツ銀杏の紋を仁木彈正の定紋にしたといふ本家本元の流れを汲む、松本幸四郎丈の仁木彈正吉右衛門丈の荒獅子男之助といふ珍らしき荒事、當代無比の役割揃ひといふ名コンビ、此床下に就き面白き話は、明治の初期、膽玉、尾上多見藏に、市川市藏、尾上和市と云ふ兄弟の棹があつた。其頃の江戸久松座へ多見藏二人りの兄弟を連れて上京した、兄市藏

は江戸の舞臺に相應しいとて名優市川小團次の取盡に依て彼地に足を止めた。多見藏は和市諸共歸つた時の狂言は恰も伽羅先代萩扇野女の政岡に尾上松縁の仁木彈正、尾上和市は荒獅子男之助の役を江戸式の荒事に勤めた、その初日松縁は仁木彈正にて心持能くセリ上る、(曲者)(エイ)(取逃したか残念だ)で幕が閉る松縁は例の如く正面を切つて反り返り白眼みを利かす(京極屋)の譽め言葉の中をしづ／＼歩む、花道六分通り迄斯くと京極屋と譽めたお客が俄にドヨメキ出した、夫でも松縁は己の仁木を請けて哭る物と内心ホク／＼物で戸屋(揚幕)へ這入りフト花道を見ると見物が動搖めくも道理和市の男之助が幕を潜つて花道へ

と云ふ印象を持たぬ折柄、霞仙の力演でやゝ意を強くした。それにも増してよかつたのは成太郎のおさんで、私は以前からこの人の眉毛無しの役に期待をもつてゐたので、果然嬉しくなつてしまつた。何うか本年もこのよきスタートをチャンスに諸君の御自重を萬望する。夜の部は新梅玉新福助の襲名披露が中心として、梅玉の諸役と、就中福助の矢田平が印象に残る。石田局は衣裳の贅と俳優の顔揃へとて歌舞伎のスペクタクルな一面を百パーセントに發揮してゐた。芝居として面白かつたのは英國孝子傳で、延若が二つ玉で縦横に活躍して、明暗兩面の自在な演技振りは頗る鮮かだつた。かうした明治物の芝居が近頃流行り出した事も一寸注意すべき傾向だと思ふ。

歌舞伎座も去年の正月に較べたら成績は上乘ですと宣傳部の住田さんのお話。藤井主任さんの艶やかなお顔もこの大殿堂の責任者として初めての正月を黒字で塗り潰して嬉しさう。狂言は晝の部で色懺悔、愛憎峠、夜の部で明路暗路女の友情等が受けてゐる。井上正夫が森田繁で若返つて大奮闘、花柳が二十場出演でこれ又大々奮闘その間に河合喜多村の双壁がチョイと巧緻な所を展

西尾福三郎・

現はれ太刀の鯉口をしめし反

りを打つて附いては入るから

堪らない。此新形に驚いた見

物は只譯もなく(音羽屋の舅)

とか(江戸下り)とか、わい

くといふ呼び聲にて仁木の

幕外では男之助に浚はれた形

と成つた。和市の戸屋へ這

入るを待兼た松縁は、モシ

舅さんく(松縁は多見藏

の門人)殺生だすぜ、斯ん

な事知られたら私は彈正に

成られませんがな、といふと

親父(多見藏)の彈正なら知ら

ぬ事、お前の彈正なら斯うし

てやらねば幕外が持てまいと

思うてナ、此の言葉に松縁は

口アングリ、舅は悪イ人ヤな

ア(故人に聞し儘に)

劇場街

雑音放送

B・B・B

×

二月の南座は菊五郎の奮闘奮闘、奮闘劇で、忠信を始めとして之役を勤めると云ふ勉強振りに人々を啞然たらしむる一方にその幕毎の變化振りに舌を捲いてゐる人々が多いが六代目心得顔に、

「ナニ、五役位ひの變化は當り前でさア。何せ狐忠信の神通力の一手を用ふれば變化は朝飯前ですよ。」

×

三津五郎は菊五郎との競演で「太刀盗人」高坏なぞで踊り抜くが、矢張り年の若い菊五郎潑刺振りに敵はないのか汗だくの體に、或る人が、「師匠苦るしいんですかい」

と尋ねると三津五郎、

開する。藝をみる人、筋をみる人、はては役者の顔をば見るだけの人も交つて、新派のお客様は千紫萬紅、我黨全盛の春を高らかに謳歌してゐる。

文樂座も去年は十九日終演だったが今年は一日だけのばした譯でこれ亦悪い方ではない。床本の初めに諸家の狂言解説を附加して、難解な淨瑠璃物の手ほどきを企てたのも宣傳部の成山さんの發案であらう。近頃通し狂言の復活に努力してゐる事も行き詰り打開の一策である。現に今度の菅原の通しをみて、初めて櫻丸切腹の理由や寺子屋首實驗に到る迄の真相を會得した人が多くあるであらう。筆法傳授や天拜山等の場はさう度々見られるものでないだけに仲々珍らしく従つて興味深く見られた。興味深いと云へば、茶釜酒の白太夫と、櫻丸切腹の白太夫と、そして天拜山の白太夫と、この三つの場の白太夫を鑑、古靱、大隅できいたのだが、同じ白太夫であり乍ら、この三太夫で語り生かされた愛すべき老人の面影が全然異つた印象を與へた事だ。語り手次第で斯く迄趣の變るものかと思ふと淨瑠璃のむつかしさが今更ら乍ら首肯れる。面白かつたのは車場の三巨頭、梅王松王櫻丸でかけ合ひのある所へ、最後に大隅の時平公があゝの豪聲でむつかしい七笑ひを笑つてのける。その間追がの三巨頭もキョトンとして控へてゐなければならぬ。全く大隅にしてやられた形で文字通り笑殺された事になる。

「イヤ、體よりも僕は頭が御覽通り禿て來たので、カズラをズラさない様にと努力するのでその方が苦しい。」

×

大阪へは四年振りの吉右衛門、例に依つての清正物で熱演するが、今度は清正物には縁の深い大阪だと云ふだけあつて、一層の氣の入れやう。

歌舞伎座のバルコニーから大阪城の空を眺めて、

「一度でいゝからあの大坂城で清正のページエントをして見たい」

と云ふのは尤もな話。だが、秀頼と清正とがエレベーターで天守閣へ登るなんてどうかと思ふね。

×

五代目高砂屋福助を襲名し

た政治郎、嬉しくて嬉しくてたまらないが、ヤヤもすると矢張り政治郎氣分になりたがつて……。こないだもヒイキの方から

「福助さん」

と呼ばれると、ウツカリして

「お父さんですか」

と問ひ返すので

「ボケたらあかん、お前やがな」

と突込まれて

「ホンニ、忘れて」

たは無邪氣な福助だなア。

歌舞伎座

「積戀雪關扉」には

松尾太夫

文字兵衛

出語り出演

この外に浪花座と角座があるが、都合で見残して京都南座へ飛ぶ。顔見世の三日過ぎに突如鴈治郎の病氣欠勤で何うなる事かと案じたが、結果は杞憂に終つて、毎日押すな／＼の満員續きにすつかり氣を良くして、引續く正月興行に東京少女歌劇で三十一日から蓋を開けて翌月の二十七日迄晝夜二回合計五十六回のロングラン、將に南座新築以來の記録である。見物席は花がこぼれたやうな若い娘さん達で一杯になり、開演中しつきりなしに好きな役者の名を連呼して、黄色い聲や桃色の聲、五色の聲の氾濫で舞臺の台詞も通らばこそ、終ひには色様な手旗を打立て、それを振舞はして叫び立てる。全く女學校の運動會に行つたやうな有様である。女學校の先生達や巷の道學者が澁面造つて甲論乙駁是非を論じてゐる間に、當の娘達は我も／＼も競つてSSKのファンになつてしまふ。はては彼女達の定宿へ押しかけてサインをして貰つたり、素顔を見たさのロハファンが雲集して、それがためにたう／＼所轄署から交通取締の巡査が出張したが、仲々そんな手に溫和しく引込む今時の娘達ではない。いやはや全く恐いやうな人氣である。

打續く好況にすつかり氣をよくした南座主任の澤潟さん、二度ある事は三度と云ふから三月の六代目もきつと満員續きに違ひないとこの所大した勢ひでゐらせられる。

PEACE Syrup

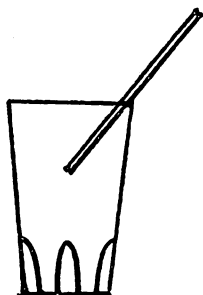


34年 サンマー スタ-

シロップ界の權威

ピースコーロシロップ

ピースフルーツシロップ



Kyoto Man-nu Co

● 書 え 覺 談 藝 ●

● 郎 一 孝 橋 大 ● 述 譯

女形の心得

(前書) 明治廿三年に刊行された「演劇通史」と云ふ書物がある。内容は歌舞伎の劇史をはじめ、各々の部門に對する簡単な説明を加へた演劇手引書とも稱すべきもので今更取上げる程のものではないが、巻末に「李園叢書」として故人名優達の藝談が掲載されてゐて、此の項ばかりは却々面白く讀むので此處に紹介することにした。勿論何れも古い文獻から抄録したものである。(大橋孝一郎 譯述)

むかし女形と云ふものは年中煎茶だけは吞まないことに定めて居りましたがこれは齒の染ることをいたく案じたためでありませう。日頃のもの言ひ立居振舞ひにも決して女の心得を忘れてはなりません。例へば男の手から物の取りやりをするなどは固く禁じられてをりましたし、部屋も必ず内側から鍵を懸けて立役を自分の部屋に招き入れてはなりません。食事もしぜい他人の目に付かない様に濟ませ、又、樂屋入りをしても化粧を濟ませてからでなければ、決して相手役に顔を見せてはなりません。とまで云はれて居ります。これは全く相手役に對して色情が覺めない様にとの心づくしからでありまして、ひいては舞臺の上で萬一情が乗らない様なことがあつてはと云ふひたすら藝を愛する心根から出でゐるのですと役者五雜俎と云ふ書物に見えて居ります。名女形瀬川路考が六十の賀の心に詠むた歌にも

面影のかはら撫子秋更て我起ふしを人に知らすな(享保歌舞伎百人撰)

と云ふのが御座るますが、これをよむと女形が老ひさらばえて行く心境が如何にも物のあはれに詠めて居ります。昔の女形はこの様に歌にさへ女の情を忘れなかつたのでありますから、その立居振舞ひがどれ程優しかつたか想像出來る譯で御座りませう。女形の心得に就いて山下京左衛門の曰く、

「女形が大切に心得なければならぬことに三ツあります。即ち、惚れてゐる男に對する仕打ちはひかへ目にしてものかすも少ない方がよろしいこと一ツ。次ぎに、自分に惚れて來る

● 藝 談 覺 書 ●

男に對する仕打ちはせいぜいズカ／＼と運ぶ方がよろしい事二ツ。次ぎに、二ツの外に狂言作者よりどの様に申して來やうとも貞女を亂す仕組みを固く辭退する事三ツ。」（江音記）
また杉九兵衛の曰く、

「若女形は色氣の失せない様に心懸けねばなりません。萬一年増女を勤むる場合にはウンと水臭い態度で勤めて下さい。婆アがよく似合ふなどと評されるのは色氣を失つた證據であります。」（舞臺百ヶ條）

役者の心得
澤村訥子曰く、

「一流の役者になつても決して無用な豪ばり方をしてはなりません。風態も馬鹿派手な恰好をするよりも、返つて目に立たぬ地味なものを撰んで用ふる方がよろしい。暑きにつけ寒きにつけても先づ一通りのものさへ揃つて居れば十分です。餘り奢りに長ずるときは肝心の芝居が忽かになつて巧く行き兼ねることがまゝあるものです。商賈人なれば金持と呼ばれることこそ本懐とすべきでありませうが、我々役者なれば金持と呼ばれるよりはむしろ名人上手と云ふ評判を取つた方が餘程嬉しいことだと思ひます。常日頃からして此の心掛けを忘れずに、着物よりも舞臺で用ひる衣裳を貯え、金銭よりもひたすら藝道にのみ専心すべきが役者の心得でありませう。」

註 舞臺で用ひる衣裳は只今では興行主が調達するのでありますが、昔は役者がその給金の内から調達したので斯様に教訓されたのであります。

坂東薪水曰く、

市川柏筵曰く、
「我々役者の身では衣裳さへたまればそれで十分身代がよくなつたと大きな顔で申せます。」

● 藝 談 覺 書 ●

「役者と云ふものはその人その人の風態のよしあしに依つて非常な損徳のあるものです。例へば風體の上らない人は藝が拙く見えませんが、風體のいゝ人なれば何處となく巧みに見えるものです。又素顔は總じて舞臺顔よりは悪いのが普通ですから、せいぜい素顔を人に見られたい様に注意して舞臺から日本全國の人にくまなく顔を合せる程の意氣込みが肝心だと思ひます。ですから成る可く外出は避けた方がよいと思ひます。」

藝談一束

市川海老蔵曰く、

「對面の五郎の役に口傳があります。即ち此の場合の五郎の心は祐經に親の敵と名乗らせるばかりで敵討は後日兄弟揃つて本望を遂げると云ふのですから、たゞ詰寄つて行くばかりで脇差の柄には手をかけるものではありません。又、朝比奈の仕草も、力競べでは、草摺をも引ちぎつて給ふ程の力なのですが、此の場合ばかりは、力づくで留すめ、「さわがずに静かに」と云ふ氣持で留めるのであります。總じて角前髪は荒事と云ふものは娘が酒に酔ふた風な氣持で勤めるのがよいのです。」

澤村宗十郎曰く、

「腹を立てる仕草をするに、侍の役なれば坐つて演じ、町人の場合なれば立つて演ずる方がよろしい。武士は口論のとき刀に手をかけぬ方が強く見えるものです。喧嘩のとき刀、脇差などをひねくり廻すのは弱く見えます。「そんなら……」と云ふ臺詞は町人に限つて用ひる言葉です。又生酔ひは疊を見て物を云ふのがよろしく、生酔ひと狂人との區別は演じ易いですが、疊と狂人との區別は演じ難いものです。疊は盲の心持ちで耳を眼にする氣持で演ずれば疊に見えるのであります。又座頭は着物の行丈を短くして、立居に裾の開かぬ様にするの

赤い帽子に
白の制服を
着た
御園クレーム
はバラの花を
想はち様な芳
香を以て心地
よくバラッシ
ユし健やかな
美しい肌を作
らうが

御園

大
小
型
型
型とあはて
三セ五十三
三セ五十二
三セ五十三

ヴァニタツシ



伊東胡蝶園 東京・大阪



木曾路の鴉

— 三幕七場 —

浪花座 上演
前進 田前

向ふ行くのは木曾路の鴉
今日の草鞋は何處へ脱ぐ
何故に脱がぬよこの宿へ。

月に一度はきつと往復する旅人。手甲脚絆土足裾取りと云つた渡世人拵へが似合つて、木曾路の宿に噂は生んで、今では木曾路の鴉と呼ばれて、宿場の女どもには、その鴉が通るのを待たれてゐる正太郎です。

今宵も、奈良井宿の背後の山々に十三日の月が昇る頃、江戸から旅を急いで正太郎が通り過ぎました。

後を追つて、山谷の吉と呼ぶ飄きん者、正太郎の子分だと自ら買つて、正太郎を慕うて行きます。

正太郎の父彌兵衛は、人里疎らな峠の麓で、盲目の娘お末と佗しくお六櫛の木地を削つて、かすかな業を勵んでゐます。

彌兵衛には暗い過去の出来事が今なほ身を苦しめてゐるので

す。それは、江戸小石川に居た頃、或るやくざに苦しめられ一命にもかゝはる際、苦しまぎれの反抗が相手のやくざを殺した。それを知つてゐる角力の權次が今尙毎月十四日に二十兩つゝ強請に来るのです。

江戸にゐる正太郎は父の爲め毎月二十兩の金を、二年この方一月缺かさず中仙道を合の宿とも三十五宿、六・幾里を木曾路の鴉と噂されて居けるのでした。

元よりその金の才覺の爲には盆の上だけでは到底及ばず、今では巾着切を稼いでゐるのです。今日も、權次は、彌兵衛やお末を苛めて立ち去つた後、江戸から到着した正太郎は妹の見えぬ目にたまる涙でそれと察して父を苦しめる虫が今去つた事を知りました。

正太郎は、父がその虫の名を聞かせてくれないので、それが

誰であるか分らないのです。其奴が判れば父のため、叩つ斬るものをと云ひますが、父は、正太郎に人殺しの大罪を負はせたくないとい知らせないので。正太郎は、是非なく妹の身の上を父に託して、毎月金飛脚をせねばならぬと諦めます。

彌兵衛は自分のため、正太郎やお末が苦勞をせねばならぬ、いつそ死なうと覺悟を極めてゐるを正太郎は看破つて、父親のその心持を思ひ切らせ、親子三人涙ながらに別れます。

正太郎が月に一度往復する鳥井峠の茶店の娘お美乃は、此邊には稀な美貌の娘です。

此のお美乃に懸想をして隙を狙つてゐるのが、角力の權次です。今日も弟分の自雷也の定五郎を連れてやつて来て、懷えて小さくなつてゐる親娘を見て、云ひたい放題を並べて、お美乃を連れて行かうとするが、お美

乃ハ葦原宿の物持結城屋と呼ぶ
呉服屋の若旦那豊次郎へ近々嫁
ぐ事になつてゐるので、父親寛
兵衛は必死になつて哀願するが
兩人は聞き入れません。

そこへ現はれたのが木曾路の
鴉。

やい、馬糞臭せえぞ、いかに
江戸を離れた木曾の山ン中でも
見え透いた事をしやアがると承
知しれえぞ、きつぱり云ふ勇前
です。遂に悪黨二人は尻尾を巻
いて失せてしまひました。

お美乃は以前より正太郎を戀
しく想ひ、正太郎も又お美乃を
憎からず考へてはゐましたが、
自分はやくざ、お美乃が結城屋
に嫁ぐのは彼女の幸福だと、自
ら思ひ切り、兩人飽かぬ別れを
致します。相不變、山谷の吉が
正太郎の跡をお伴して行きます

(第一幕より一ヶ月後)

親のため、巾着切を働いた正
太郎に岡ッ引の眼が光り、木曾

路を急ぐ彼の跡を十手が追ひま
す。

それと知つた正太郎は、今度
こそは父を脅迫する悪黨を叩つ
斬つて仕末をつけやうと決心し
ます。岡ッ引二人を前において
一ヶ月後木枯しの吹く時分には
きつと尋ねて行くから今度だけ
は見逃してくれと云ひますが、
もとより相手は承知致しません
意を決して正太郎は一人を斬
つて逃げてしまひます。

茶店の娘お美乃は正太郎の事
を忘れ兼ねてはゐましたが。是
非なく結城屋へ嫁ぎました。そ
の晩に例の角力の權次にさらは
れてしまひましたが、どこへ隠
したか判らないので、お美乃の
父親寛兵衛、婿の豊次郎等が心
配してゐる處へ正太郎が通り合
せ、きつと助けてやると豊次郎
に請ひ合ひます。そこへお美乃の
弟萬助が、姉の押籠められた場
所を發見して知らせに來ました

そこに意外にも正太郎に取つ
ては現在親の彌兵衛の家でした
よしッ俺が引受けたと新らしい
草鞋を穿いてお美乃の父寛兵衛
に云ふのでした。

父つさん、木曾路の鴉と異名
をとつて、實名やくざの正太郎
ちつと胸に當る事があつて、こ
れつきりこの宿へも、羽ばたき
をする事もなくなるだらうが、
いつ迄も、いつ迄も名前丈は忘
れてくんなさるな……。

角力の權次、自雷也の定五郎
なぞに縛められたお美乃は、芒
原の中へかつがれて行かうとし
てゐます。

「父あん！——」彌兵衛の居處
をたづねての正太郎の叫び聲、
「おゝ作」と答へんとする彌兵衛
親娘に口止めをして、權次らは
納屋の中にかくれます。

入違つて正太郎がやつて來ま
した。

父つあん、お美乃はごうしま

した。

と聞くと彌兵衛は知らぬと云ひ
振ります。

その父や妹の態度で、今まで
自分が毎月二十兩宛運んで來た
相手が權次である事を知つた正
太郎は、相場師と偽り、今は巾
着切となつた身の職業を打ち明
け、父を苦しめる權次を叩つ斬
り、岡ッ引一人斬つた此の身體
二十五年の短い命、父の仕業の
江戸小石川の人殺し下手人とも
名乗つて出る氣だ。不惑なのは
盲の妹、どうぞ末永く面倒見て
くれと頼み行かうとする折柄、
又も襲ふ御用の十手。

正太郎は乱闘の末、芒原へと
駆けつけます。

大きな月が出て、盆踊りの唄
聲が夜風に送られて聞えて來ま
す。

今しもお美乃の身體に手を掛
んとした權次のまへに躍り出た
のは正太郎であります。

(二四頁へつづく)

中村鴈治郎の逝去



一月二十八日來絶望を傳へられ阪大病院の三階特別室に死線を彷徨する事三晝夜、その間輸血に強心劑注射にあらゆる醫學的手段と、稀に見る強大なる心臓力は奇蹟的再起をすら期待された關西梨園の巨星中村鴈治郎氏は、三十一日夜來肺機能を冒され、遂に呼吸麻痺の症状を呈して、今晚四時半頃には全く呼吸困難となり、臨終間近きを想はせたので、當直の永井、西岡、宇野、各醫師は長三郎夫妻、扇雀

夫妻、芳子、長二郎夫妻、神山あさ、魁車夫妻、おせん夫人、白井松竹會長らを順次二人宛病室に招じ靜かに永別の水を丈夫の唇へそがせ、五時十分には一同を枕頭に集め、靜かに眠るが如く最後の瞬間に備へさせた。丈夫はこの頃よりそこはかとして吐く息も細くなり、何らの苦惱もなく、ニンマリと笑顔を作つて遂に五時二十分、十三歳より、舊臘南座顔見世興行の「鎌倉三代記」の三浦之助を最後とする六十餘年の俳優生活の大團圓を告げた。近親者の歎きの聲は密閉された病室外に洩れた……。

× × ×

中村鴈治郎を死に至らしめた病源は遠く大正十三年十一月小倉市勝山劇場で「土屋主税」「紙治」等上演せる當時腰に腫物を生じ、白井會長の勧めもあり鋭意療養に盡くし大した事もなく舞臺を勤めて居たが、昭和七年二月、中座で「寺小屋」「梅忠」等上演の際、再發し、十一日より源藏と忠兵衛は延若が代役を勤めた事があり、昭和八年十月大阪歌舞伎座開場興行で勘平、平野屋五兵衛、六條少將、河庄の

治兵衛にて奮演の際、腰痛を訴へ足に浮きを生じたが、斷然舞臺は休まず二十五日間出勤した。同十一月は名古屋御園座、十二月は京都南座顔見世興行で「河庄」の治兵衛一役を勤めたが、「舞臺は戰場だのに一役とは」と大分不服を唱へるの元氣であつた。昨年一年一月は中座の古式復興大歌舞伎で「八大傳」道節のだんまり、八百屋半兵衛、それに手打にまで出て健在振りを示した。三月は大阪歌舞伎で弘法大師、北條四郎、南部坂で氣を吐き、五月は京都南座と岡山劇場で北條四郎「大晏寺」の治郎右衛門を力演、六月は大阪歌舞伎座で「望の港」「石切梶原」を十月同座で「盲公」と「すし屋」の權太を颯爽と演じた。十二月京都南座顔見世へ三浦之助一役で出勤したが腰痛の爲休演（四日より我童が代役）東山の旅館で療養、打上げまでにもう一度出演すると頑張り續け十八日阪大病院に入院、國手諸博士醫員等の手厚き療治を受けつゝ昭和第十春の元旦は病院で迎へたのであつた。従つて大阪最後の舞臺は九年十月「石切梶原」と「壽しや」の權太、東京は八年二月歌舞伎

座「山科」の内藏之助「戀の湖」の半兵衛、京都は九年十二月「鎌三」の三浦之助、神戸は八年四月松竹劇場「山科」内藏之助と「土屋主税」、名古屋澤方面は九年十一月「陣屋」の盛綱、九州方面は八年九月「土屋主税」「あかね染」の半七である。

最後の舞台姿
「鎌三」の三浦之助



次號三月號は・・・
中村鴈治郎追悼號

新 福 助 に 望 む

西 尾 生

中村政治郎と云へば何處となく子役らしい雅ない感じが残つてゐるが、中村福助と云へば押しも押されもしない堂々たる一枚看板の重味がある。これは單に高砂家にとつて重要な家の名である許りではなく、昔は個より、將來に亘つて我關西劇界にとつて、輕々に扱つてはならぬ大切な名跡である。歌舞伎界の春に翹がけて梅玉先づ開き、同時に目出度き正月の福助が名詮自稱の福々しい姿で新しく見參する事となつた。

新福助は確かに二十六歳位だつたと記憶するが、年の若い割に、格腹が堂々としてゐるので、三十歳以上の他の名題諸優と伍して、決して遜色のない存在を示してゐる。梨園の名門としての特典を別にして、公平に考へてみて、今迄の政治郎の技能は、一と廻り年長の人達と並べても尙餘裕があつた位だ、際立つて推賞する程の傑作も記憶してゐないが、ユツタリへ構へてジリ／＼押して行く底力の強さに、寧ろ大器晩成の趣さへあつて、鋭角的な鋒鋦を表さない所に却つて未知數の興味と期待が多い。

古典座の今迄の仕事が、割合に小規模で、對外的に地味であつた爲、相當な業績の割に政治郎その人の眞價を知らない人が多いやうだ。筆者等も古典座については殆んど一回見たゞけで、何等特異な印象も感銘も持つて居ないが、記録をみたり、人傳にきいたりして、相當の關心は怠つてゐないつもりだ。同座の組織についても、背後の福助その人の地味で着實な一面が表れてゐて、藝修業の道場としては、却つてこんなのが好適なのではあるまいかと思つてゐる。

願はくば、新福助襲名を好機として、今後はもつと／＼古典座の存在を積極的に認識せしめる事が望ましい。

新福助は故梅玉の血をそのまゝに受けて、新梅玉よりも、より故人に近い風貌と姿態を備へてゐる。故梅玉の壯年時代にはふつくらとした女形の味に、柔かい

ウ キ ス キ
ブ ラ モ デ
ベ ユー ミ
キ ー ミ
ジ バ ン
滋 養 葡 萄 酒

國產金鶴印

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品



元 賣 發

株式會社

店 商 山 横

地番三町後豊區東大阪市

電話(94) 一六六一
二〇一三
四六四九

趣があつて満都の人氣を湧かせたものと
といへるが、その半面で、日蓮坊や
頓兵衛等を十八番にしてゐた人だから、
堅く強い一面があつた。新福助は女形の
方に大して期待は持てないが、故梅玉の
他の一面のこの強さ、堅さは充分に表せ
るだらう。

から、これでみつちり堅めてあの偉軀を
軟かく隠す事ができさへすれば、菊五郎
の畑にだつて向かない人ではない。お近
い所では壽三郎等そのまゝでお手本にし
て結構な先輩である。

きつて東京へ進出し、踊りで十二分に叩
き込んで、何より先づ體の線を和かくす
る事だ。その苦勞に比べたら、新作物の
勉強は樂なものだ。樂を捨て先づ苦に
つくべし。と敢て改名の門出に賀詞を呈
すると共に、一言希望を述べておく次第。
他所見するな新福助。實生活の心持に
も、又、舞臺の上でも。



伽羅先代萩

鶴、千アレ、もうまゝぢや、うれしい、うれしい。

わが子も共に悦ぶ顔、見れば胸まで突き掛る、泪呑み込みくぐて

政、もう上げますぞへ

千、かゝさま、早う上げましてや政、まちつと蕭立てる其の間、お氣

に入りの雀の子、もう親鳥の來る時分、そこへ直しておなぐさみ

千、アイく。

と千松が、返事はすれど立ちなやみ、歩む姿もたよ

くと、置き直したる小鳥籠、ちと教へる親鳥の、軒

端の竹に飛びかはす、子は孝行に面やせて、はごくみ

返すうば玉の泪をかくすうない髪、かゝれば直に飯に

なる。

アレモウ飯ぢや、うれしいく

悦ぶ子

政、コレ千松、何んともないと云ふ下から、世話しない何の事ぢや。いつも唄ふ雀の唄、唄ふて御機嫌とりや、エ、ごんな子では有るわいの

しかられて、おろく泪しやくりながらのしめり聲千、こちの裏のちさの木にく

鶴、雀が三疋さまつてく

千、一羽の雀の云ふことにやく政、タヤ呼んだ花嫁御く

竹の下葉を飛び居りて、籠へ寄り來る親鳥の、餌ばみをすれば、小雀のはしさし寄するありさまに

鶴、アレく雀の親が子になにやら喰はし居る。なれもあのやうに、早うまゝがたべたいのう。

小鳥をうらむ御心根、ヲ、御道理ぢやと言ひたさをまざらす聲もふるはれて

政、わしが息子千松がくくア、コレ、千松、何を泣き顔する事があるものか、ちいそうても侍ぢやコレ。

七ツハツから金山へくト、此の時雀飛び散る。政岡思入れあつて一年待てどもまだ見えぬ、

鶴、乳母、まだまゝは出來ぬかや政、そのやうにおせがみ遊ばすと、此ように怖いおじが金山へ金堀にいつて戻らいて

二年待てどもまだ見えぬ、

ト、政岡嘉藤次を押付る、よろしく襦の裾へかくす。

千、かゝさま飯はまだかいの

政、エ、世話しないそなたまでが、

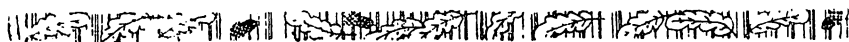
同じ様に行儀の悪い

千、イエくわしはたべたい事はなけれども、御前さまがおひもじからうと思ふて

政、エ、なんの、強いお殿さまがおせがみなされう、そりやそちがせがむのぢや

千、イエくわしはせがみは致しませんぬ。

政、サアせがますば、今の唄、聲は





りあげて唄ふて見や。

云はれて泪の聲はり上げ

千、ほろりくとお泣きやるぞく

力なく泣き聲を、隠し

てつれる母親が

政、なアにが不足でお泣きやるぞ

く。

唄の唱歌も身に當る。泪は

お乳が胸の内、子ゆへの闇

だやるせなき、若君小影を

打ちながめ。

鶴、アレく千松、狎が来る、呼べ

く

千、ちんよ、呼べく

呼べば駈け来る様の上

政、ヲ、よいさころへよう来やつた

な、ほんに我は仕合せもの、おす

べりの御ぜん、殿さまの御きげん

直した御ほうびぢや。

紙折り敷いて並ぶれば、喜

こぶ體を見る若君

鶴、乳母、おりやアノ狎になりたい

わいの

羨みたまふ御不情

政、ヲ、道理ぢやく

日本國のその内に、幾億萬

と限りなき、人の果報を受

けたまひ、五十四郡の御主

しと

壽曾我對面

工、思ひ出せばヲ、夫れよ○

ト大小入りの合方に成り、

安元二年神無月十日餘りの事成り

しが佐殿をなぐさめんと伊豆相模

の若殿原奥の狩の其野歸るさ

十、赤澤山の南尾崎柏ヶ崎の半覆に

人や待つとも白月毛の駒にまたが

り祐康が

工、然も其日の出立は秋野の摺たる

狩衣に千段藤ワの弓たづさへ

十、竹笠さつとこがらしに吹はらし

五、絶所惡所のきらひなく、しんづ

くとおゆませたり

近、待ちもふけたるこなたには椎の

木三本木だてに取り一のまふじは

小藤太成家

八、二のまぶしは三郎行氏切て放て

ばあやまたす

工、河津が乗つたる駿足の鞍の山形

射けつゝて行藤のまぎはより前へ

すつばと射通したり

五、万夫不當の祐康も大事の痛手に

たまり得ず

十、馬よりごふと落こちの露と消た

る赤澤山

工、その祐康が面ざしに○もしやお

こたら兩人は

十、斯くお目立升る上からは何をか

包まん我々は河津の三郎祐康が忘

れがたみの二人の兄弟

工、兄の一満成長して

虎、祐信どのゝ養子となり

十、曾我の十郎祐成と申升る

工、弟箱王人なつて

少、北條どのゝゑぼし子にて

五、曾我の五郎時致

工、扱こそ兄弟

十、工藤左衛門

五、十郎祐經どのゝ

工、ハテめづらしい

三人 對面じやナア



編輯雜記

村上 勝

◆ 厩治郎丈危篤——廿八日から宣傳部員は交代で病院に行つてゐたが、三十一日夜田中マーチャンと代つて高田、板藤兩君と僕が病舎に警戒線を布く。一日の午前三時半頃になつて廊下に陰惡な空氣が流れた。白井會長があはたどしくドアの中へ……。一門の人達が急いで入る。僕は各社の社會部の人達と病室の前で佇んでゐた。夜はまだ明けきつてゐない。無氣味な時が過ぎた。ハツとした瞬間、高田君がドアを排す、と宇野主治醫が、悲痛な面持に指て、時間を示しながら、僅かに五時廿分と云つた。悲しくも名優厩治郎丈は永遠に逝つたのである。

◆ 丈の入院から死までの四十有餘日間僕ら以上は寢食を忘れて活躍された各社各通信社

の方々に深甚の敬意を表す

◆ 厩治郎丈は本誌にも種々御好意もたれ、十二月顔見世特輯號には、最後の舞臺となつた三浦之助に就いて、藝談を寄せられた。これも今は悲しい思ひ出である。謹んで哀悼の意を表すと共に、別項の通り、中村厩治郎丈追悼號を出す。

◆ さて、今日は歌舞伎座が東西大歌舞伎、これに對して南座が東京大歌舞伎で競演、中座は家庭劇本年度最初のお目見得、浪花座は第六回公演の前進座一黨で角座は關西新派の續演である。

◆ 本號は芝居見たまゝを多くした。編輯者の意圖は道頓堀をより大衆的なものにしたからである。それから、連載してゐた「樂屋訪問記」は僕が多忙なために、漫畫家の妹春君さかけ違つて、ものにならなかつた。三回きりにせず、次號には必らず、書く。

昭和十年二月一日發行

月刊『道頓堀』第十一號

◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◆ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◆ 御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所 大阪電報通信社

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。
大阪市北區中之島三丁目

一部 金參拾錢 (郵錢五厘)

昭和十年二月一日印刷
昭和十年二月一日發行

大阪市南區難波新地三番町

發行所 松竹興業株式會社大阪支店

共同編輯 山本 上江 貞也

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區難波新地三番町

(大阪歌舞伎座内)

發行所 松竹興行株式會社大阪支店

道頓堀編輯部

◆ 丈の入院から死までの四十有日
上に寢食を忘れて活躍された各社各通信社

あぶら取紙始末 辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹼

専賣特許 常用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商錄登



大坂 朝日堂株式會社

本舖 大阪 中田スキナ屋謹製





固形浅田飴

たんせき、感冒

虚弱症、老人小兒によし

観劇、旅行、スキー、集會など
 人混中では咽喉を保護し、セキ
 や感冒を豫防する固形浅田飴の
 御携帯をお忘れなく……………



本舗 東京 大阪 堀内 謹製